池田市埋蔵文化財発掘調査概報

１９９２年度

１９９３年３月

池田市教育委員会

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

１９９２年度

１９９３年３月

池田市教育委員会

序　　文

池田市は大阪府の北西部に位置し、緑豊かな五月山と雄大な猪名川に育まれています。このような豊かな自然環境の中、古代から政治、経済、文化の中心として池田は発達して参りました。また、近年、この地は陸、空の交通の要衝として、あるいは、大阪のベットタウンとしても開発が行われ、大きく様相が変わりつつあります。

このような開発、発展とは裏腹に、我々の祖先が久しく伝え残して来た文化遺産や自然が破壊されつつあり、かつての面影を偲ぶことができないほど様がわりしたことも事実であります。文化遺産や自然は一度破壊されると二度と復元することはできません。私たちはそのことを十分認識し、保護と継承に努めなければなりません。

この報告書は上述した状況の中、破壊の危機に面している埋蔵文化財について、国、並びに、大阪府の補助を受けて実施した発掘調査の概要報告であります。本書が文化財の継承、理解に通じれば幸いと存じます。

なお、調査の実施にあたっては多くのご教示、ご助言をいただきました諸先生、並びに、関係機関をはじめ、土地所有者、近隣住民の方々には文化財保護に対して格別のご理解とご協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

池田市教育委員会

教育長　西　山　幸　男

例　　言

1．本書は、池田市教育委員会が平成４年度国庫補助事業（総額5,000,000円、国庫50％、府費25％）として実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、池田市教育委員会教育部社会教育課が実施し、中西正和が現地を担当した。

3．本書の執筆は中西が行い、編集は野村大作の協力を得て、中西が行なった。また、本書の製図、遺物実測にあたっては野村大作、加賀美樹、村井律子、正岡克己、田邊哲朗、志田原国博、森季子、梶原美紀の協力を得た。

4．本書で使用する土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修）による。

5．調査の進行にあたって、川口宏海氏（大手前女子学園）、前川要氏（富山大学）よりご指導、ご助言を賜り、また、施主、並びに、近隣住民の方々に深甚なるご理解、ご協力をいただいたことに対し、深く感謝いたします。

目　　次

歴史的環境 …… 1

池田城跡主郭部発掘調査 …… 5

1．池田城跡の概要 …… 7

2．池田城跡主郭部発掘調査 …… 9

調査に至る経緯 …… 9

調査の概要 …… 9

a　基本層序 …… 13

b　検出遺構 …… 14

博列建物 …… 14

土塁 …… 15

c　出土遺物 …… 15

d　まとめ …… 18

池田城跡第27次発掘調査・宮の前遺跡第28次発掘調査 …… 25

1．池田城跡第27次発掘調査 …… 27

調査の概要 …… 27

a　基本層序 …… 27

b　検出遺構 …… 29

杭列 …… 29

落ち込み …… 29

c　出土遺物 …… 29

d　まとめ …… 31

2．宮の前遺跡第28次発掘調査 …… 32

宮の前遺跡の概要 …… 32

調査の概要 …… 34

a　基本層序 …… 34

b　検出遺構 …… 34

SD－1 …… 35

SK－1 …… 35

c　出土遺物 …… 36

d　まとめ …… 37

挿　図　目　次

第１図　市位置図 …… 1
第２図　遺跡分布図 …… 2
第３図　豊島南遺跡焼失住居跡 …… 3
池田城跡主郭部発掘調査
第４図　調査地位置図 …… 7
第５図　主郭部全体図 …… 8
第６図　東壁土層図 …… 10
第７図　調査地全体図 …… 11～12
第８図　塹列建物平・立面図 …… 13
第９図　土塁平・断面図 …… 14
第10図　塹列建物出土遺物 …… 15
第11図　塹 …… 16
第12図　第４層出土遺物 …… 17
第13図　中国製青磁碗 …… 18
第14図　石鏃・銅銭 …… 18
池田城跡第27次発掘調査
第15図　トレンチ位置図 …… 27
第16図　第１・２トレンチ平・断面図 …… 28
第17図　杭列 …… 29
第18図　出土遺物 …… 30
第19図　池田城跡復元図 …… 31
宮の前遺跡第28次発掘調査
第20図　調査地位置図 …… 32
第21図　トレンチ位置図 …… 33
第22図　トレンチ平・断面図 …… 34
第23図　出土遺物 …… 35
第24図　周辺調査地図 …… 36
第25図　第22次調査出土遺物 …… 36

図　版　目　次

池田城跡主郭部発掘調査

図版１　(1)　池田城跡航空写真（南から）
(2)　池田城跡主郭部調査地全景
図版２　(1)　塼列建物（南から）
(2)　塼列建物（南東から）
図版３　(1)　塼列断面
(2)　塼列建物内土層断面
図版４　(1)　土塁（北から）
(2)　塼列建物出土遺物
図版５　(1)　第４層出土遺物
(2)　塼　軒平瓦　青磁　銅銭・石鏃

池田城跡第27次発掘調査

図版１　(1)　第１トレンチ（東から）
(2)　第２トレンチ（東から）
図版２　(1)　杭列（南から）
(2)　落ち込み（東から）
図版３　(1)　第１トレンチ出土遺物
(2)　第２トレンチ出土遺物

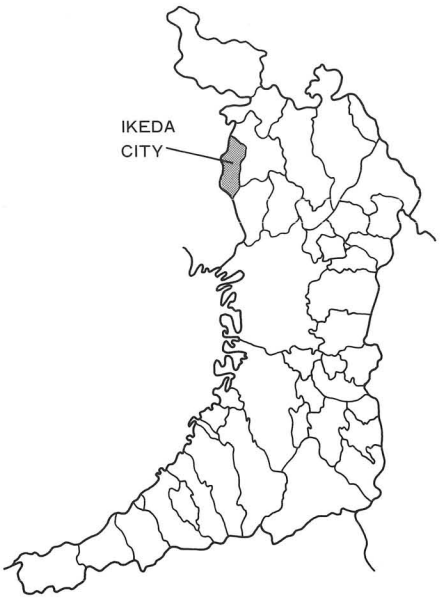
宮の前遺跡第28次発掘調査

図版１　(1)　トレンチ全体（南から）
(2)　SD－１（北から）
図版２　(1)　出土遺物
(2)　出土遺物

歴史的環境

池田市は大阪府の西北部に位置し、東西4.1㎞、南北9.2㎞の南北に細長い市域を有している。その位置は、西摂平野の北部、丹波山地に源を発する猪名川が北摂山地を分断して平野部に出たところにあり、古くから谷口集落として、大阪と丹波、能勢地方の物資集散、文化交流に中心的な役割を果してきた。

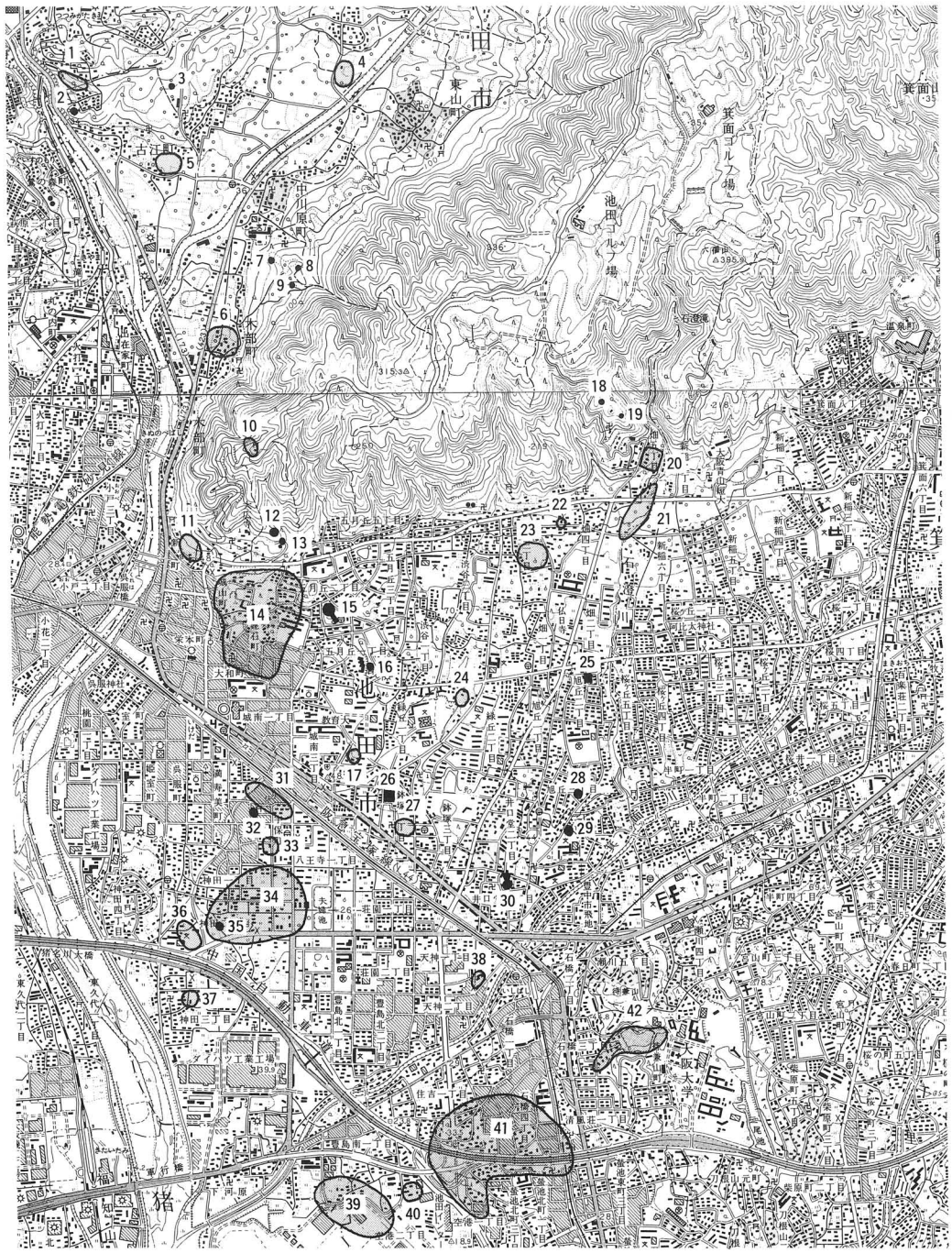
池田市の地形をみると、市域の中央には五月山塊が占め、それより北には、北摂山地および余野川によって形成された沖積平野が広がっている。一方、五月山塊より南には、標高50～100ｍの緩やかな五月山丘陵が、更に、南側には、猪名川によって形成された広大な沖積平野が広がっている。このような自然環境の中、人々は旧石器時代から生活を営んでいたことが近年の発掘調査で明らかにされている。



第１図　市位置図

旧石器時代　現在のところ旧石器時代の遺物が出土した遺跡としては、伊居太神社参道遺跡と宮の前遺跡（蛍池北遺跡）が挙げられる。伊居太神社参道遺跡は標高約50ｍの五月山塊西端部に位置する。明治年間から石器が採集され、その中に少量であるがナイフ形石器、尖頭器等の旧石器時代に比定されるものが認められている。また、宮の前遺跡では昭和61年度の大阪府教育委員会や平成元年度の豊中市教育委員会による蛍池北遺跡の調査で国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代　上記した伊居太神社参道遺跡では、サヌカイト製の石鏃が採取され、五月山丘陵に位置する京中遺跡ではサヌカイト製の石鏃、石匕が、また、近隣の畑ではサヌカイト製の尖頭器が採集されている。一方、南部の台地では、神田北遺跡で石鏃、石匕、宮の前遺跡で石棒が採取されている。近年の発掘調査では、池田城跡下層から晩期の生駒西麓産突帯文土器が出土し、また、豊島南遺跡で後期の中津式土器や晩期の土器が出土している。しかし、遺構は検出されておらず、遺跡の規模・性格等は明らかではない。



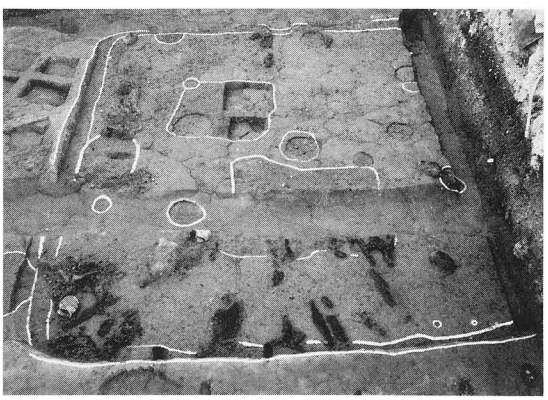
1．鼓ヶ滝遺跡　2．古江古墳　3．古江北古墳　4．吉田遺跡　5．古江遺跡
6．木部遺跡　7．木部１号墳　8．木部２号墳　9．木部桃山古墳　10．愛宕神社遺跡
11．伊居太神社参道遺跡　12．娯三堂古墳　13．娯三堂南古墳　**14．池田城跡**　15．池田茶臼山古墳
16．五月ヶ丘古墳　17．鉢塚北遺跡　18．善海１号墳　19．善海２号墳　20．石積廃寺
21．新稲西遺跡　22．畑有舌尖頭器出土地　23．京中遺跡　24．夏湖池遺跡　25．野田塚古墳
26．鉢塚古墳　27．鉢塚南遺跡　28．狐塚古墳　29．石橋古墳　30．二子塚古墳
31．禅城寺遺跡　32．宇保猪名津彦神社古墳　33．宇保遺跡　34．神田北遺跡　35．脇塚古墳
36．門田遺跡　37．神田南遺跡　38．天神遺跡　39．豊島南遺跡　40．住吉宮の前遺跡
41．宮の前遺跡　42．待兼山遺跡

第２図　遺跡分布図

弥生時代　弥生時代に入ると広範囲に遺跡が分布する。前期の遺跡は、現在のところ五月山北麓に位置する木部遺跡だけである。当遺跡は工事中発見された遺跡で本格的な調査がされていないため、詳細は不明であるが、弥生時代前期から後期の土器が出土しており、池田市内では唯一弥生時代全般を通じて営まれた遺跡である。中期に入ると台地上に位置する遺跡が現れるようになる。宮の前遺跡は昭和43年・44年に中国縦貫自動車道建設にともない調査され、方形周溝墓、竪穴式住居跡、土壙墓等が多数検出されている。また、宮の前遺跡から西へ約１㎞に位置する豊島南遺跡では方形周溝墓が検出され、宮の前遺跡との関連が注目される。後期に入ると、宮の前遺跡、豊島南遺跡は消滅し、かわって、五月山の丘陵上に位置する池田城跡下層、鼓ケ滝遺跡、京中遺跡、愛宕神社遺跡等の遺跡が現れる。池田城跡下層では平成３年の調査において、ベット状遺構を伴う竪穴式住居跡が検出されている。台地では神田北遺跡が現れるが、全体的に後期に入ると集落は五月山の丘陵に散らばり、小規模化する。

古墳時代　池田市内の前期古墳は、共に竪穴式石室を有する池田茶臼山古墳と娯三堂古墳がある。池田茶臼山古墳は五月山塊より派生する丘陵の鞍部に築造された全長62mの前方後円墳で、葺石、埴輪列が検出されている。娯三堂古墳は池田茶臼山古墳より北西約500mの五月山中腹に位置し、画文帯神獣鏡が出土した径27mの円墳で、同一の墓壙内に竪穴式石室と粘土槨が存在することが確認されている。中期では高塚式の古墳はなくなり、かわって、低墳丘古墳が宮の前遺跡、豊島南遺跡で見られるようになる。後期では善海１・２号墳、木部１・２号墳、木部桃山古墳、須恵質の陶棺を持つ五月ケ丘古墳のような単独、あるいは２～３基を一単位とする小規模な古墳が現れるが、群集墳は形成されない。しかし、一方で、巨大な横穴式石室を有する鉢塚古墳や前方後円墳の二子塚古墳が築造されており、後期古墳の中でも、異質の存在である。

古墳時代の集落遺跡としては、神田北遺跡、木部遺跡等で須恵器や土師器が出土しているが、遺構の詳細は判然としない。豊島南遺跡では布留式の土器を伴う焼失住居跡が検出され、現在のところ、市内において古墳時代前期の集落遺構が確認された唯一の遺跡である。後期に入ると少しではあるが、検出遺構も増し、宮の前遺跡では竪穴式住居跡が検出されており、また、豊島南遺跡では竪穴式住居跡、溝が検出されている。



第３図　豊島南遺跡焼失住居跡

歴史時代　集落遺跡としては、宮の前遺跡で奈良時代から平安時代にこの掘立柱建物跡が検出され、また、豊島南遺跡でも掘

立柱建物跡や円面硯が検出されていることから、西国街道沿いに、郡衙級の施設か有力者の屋敷の存在が考えられる。寺院跡としては白鳳・天平時代の瓦が採取された石積廃寺があるが、未調査のため詳細は明らかではない。中世では神田北遺跡で掘立柱建物跡が検出され、後白河院領として開発が推進された呉庭荘と関係するものとも考えられる。室町時代から戦国時代には、国人池田氏が豊島郡一帯の政治、経済を掌握する。池田氏の出自の詳細は明らかではないが、応仁の乱ごろから摂津守護細川氏の被官として勢力を拡大させていった。しかし、永禄11年（1568)、織田信長の摂津入国により、降伏を余儀なくされ、ついには、元家臣荒木村重によって、その地位を奪われることになった。池田氏の居館であった池田城は、五月山塊から南方へ張り出した台地上の南麓に位置し、現在でも主郭は土塁や空堀が良好に残る。昭和43・44年に主郭部の一部が調査された際、礎石を伴う建物跡や枯山水様の庭園跡が検出され、また、平成元年からの調査では虎口、建物跡、小規模な石垣、内堀等を確認している。

参考文献

坂口重雄「地形と地質」『池田市史』各説篇　1960年

富田好久「考古学上に現れた池田」『新版池田市史』概説篇　1971年

橘高和明『原始・古代の池田』池田市立池田中学校地歴部　1985年

池田城跡主郭部発掘調査

例　　言

1．本章は、池田市城山町2100－１、２に所在する池田城跡主郭部の概要報告である。

2．発掘調査は、平成４年４月28日から同年６月30日にかけて実施した。また、調査面積は150㎡である。

3．発掘調査は、本市教育委員会教育部社会教育課が実施し、中西正和が現地を担当した。

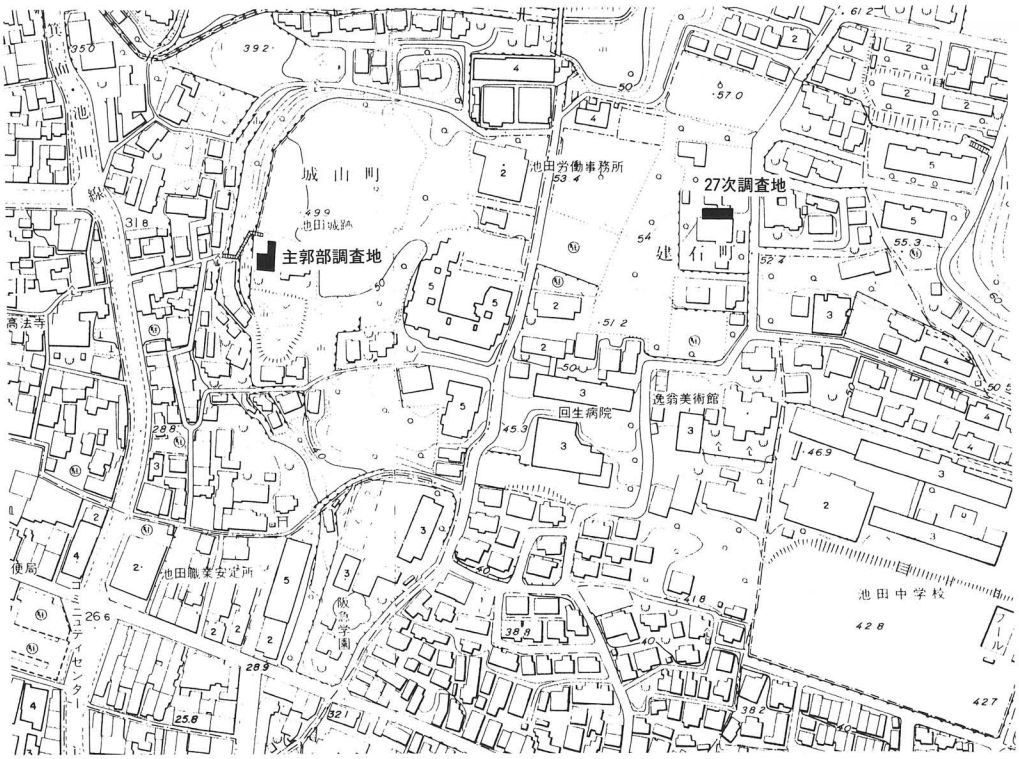
4．調査にあたっては、野村大作、加賀美樹、正岡克己、森本陽二郎が参加した。

1．池田城跡の概要

池田城は池田市の城山町、建石町一帯に広がる国人池田氏の居城である。池田城跡は五月山塊から張り出した、台地の西縁辺に立地する。この台地からは、旧池田村を眼下に置くことができ、また、丹波山地から大阪湾に流れ込む猪名川、大阪と能勢地方を結ぶ街道を一望することができ、当時の交通の要衝に選地されている。

池田城を築城した国人池田氏の出自については明らかではないが、14世紀中頃の資料からその名が散見されるようになる。15世紀後半頃以降、摂津守護細川氏の被官として、幾度かの落城を経験しながらも、荘園経営や高利貸経営により勢力を伸ばし、摂津の国人の中でも有力な地位を得るに至った。しかし、永禄11年（1568）織田信長による摂津入国に際し、降伏を余儀なくされ、信長の支配下になった。その後、元家臣であった荒木村重によって城を奪われ、村重の有岡城入城に伴い、池田城は政治・経済支配の拠点としての役割を終えることとなった。

現在でも池田城跡の主郭部は、土塁と空堀が良好に残り、当時の面影を少しは窺わせるが、城全体の構造について不明な点が多く残されていた。昭和43、44年に主郭部の一部が調査され、建物跡に伴う礎石、石組の溝、中世城郭では珍しい枯山水の庭園跡、落城に伴う焼土層等が検出された。また、平成元、２、３年に実施された調査では、排水のための暗渠を伴う虎口、建



第４図　調査地位置図

物跡に伴う礎石、石組の溝、小規模な石垣、内堀等検出された。一方、主郭部外では主郭部の南方約100mの位置で大手門が存在することや、空堀が幾重にも巡らされていることが判明しており、少しずつであるが城の全容が解明されつつある。また、池田城以前の時代についても明らかになりつつあり、昭和60年の大阪府教育委員会による調査では縄文時代晩期の土器、弥生時代後期の竪穴式住居跡、古墳時代中期の土坑が検出され、平成３年の池田市教育委員会による調査では、弥生時代末期の竪穴式住居跡が検出されている。

第５図　主郭部全体図

2．池田城跡主郭部発掘調査

調査に至る経緯

主郭は、戦後間もないころ大阪第二師範学校附属中学校が建築された。昭和32年、中学校は廃校になり、かわって、大阪教育大学学生寮となった。昭和40年に入ると、学生寮が鉄筋コンクリートに建て替わることとなり、これを契機として、昭和43年に大阪教育大学によって発掘調査が実施され、庭園跡、建物跡、排水溝の他に落城を物語る焼土層などが確認された。その後、池田城跡の保護を求める市民の運動によって、学生寮の鉄筋コンクリート化は中止になったものの、以後、20年以上にわたって、門は閉ざされ、自由に市民が立ち入りできない状態が続いた。

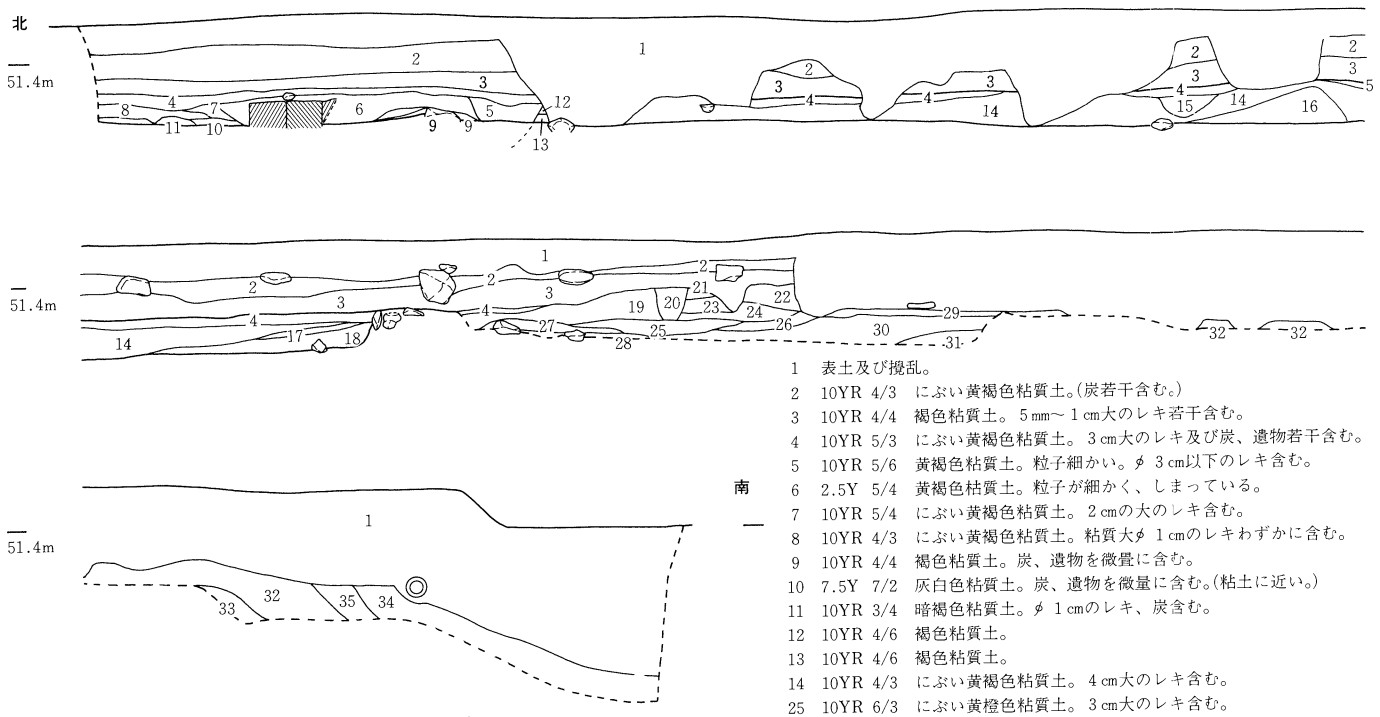
池田市は、池田城跡が良好に城の面影を残し、大阪府を代表する中世城郭として、学術的に重要であり、また、池田市のシンボルであるとの認識から、広く市民に解放し、そして、活用できるようにするため、大阪教育大学や各関係機関と協議を重ねた結果、池田市制が50周年を迎えた平成元年に主郭部を購入し、その場所に、広く市民に解放された公園が整備されることとなった。これに際し、池田市教育委員会は、平成元年度から主郭内の遺構状況を把握するため、3ヶ年の計画で発掘調査に着手した。

当初、平成3年度までの3ケ年の計画であったが、主郭部の南西の用地買収が進んだ結果、平成4年度も引き続き調査を行う機会を得た。平成4年度の調査は、主郭の南西部で、約150㎡を対象に実施した。調査予定地からは、池田の町並を眼下に見下ろすことができ、南には、主郭に附随する曲輪がある。また、平成2年度の調査では、主郭部の南東において土塁を確認し、その土塁が主郭の南縁に構築されていることが認められたため、更に、本調査地にも伸びていることが予想された。

調査の概要

本年度の調査区は、前年度までの調査に際して主郭全体に設定した地区に基づいた。この調査区設定方法は、地形上、磁北に合致させず、主郭部西側の斜面から東側の堀までの最も長い辺がとれるラインを基線とし、起点を西北端においた。また、この起点より東へ5m毎に、1、2、3…、南へA、B、C…とし、西北杭をその区の地区名とした。

この地区割に基づき、今年度の調査はSラインより南側、4ラインより西側を調査区とし、さらに、4ラインに沿って北へ2.5mの幅で、調査区を拡張し、また、東側には任意のトレンチを設定した。

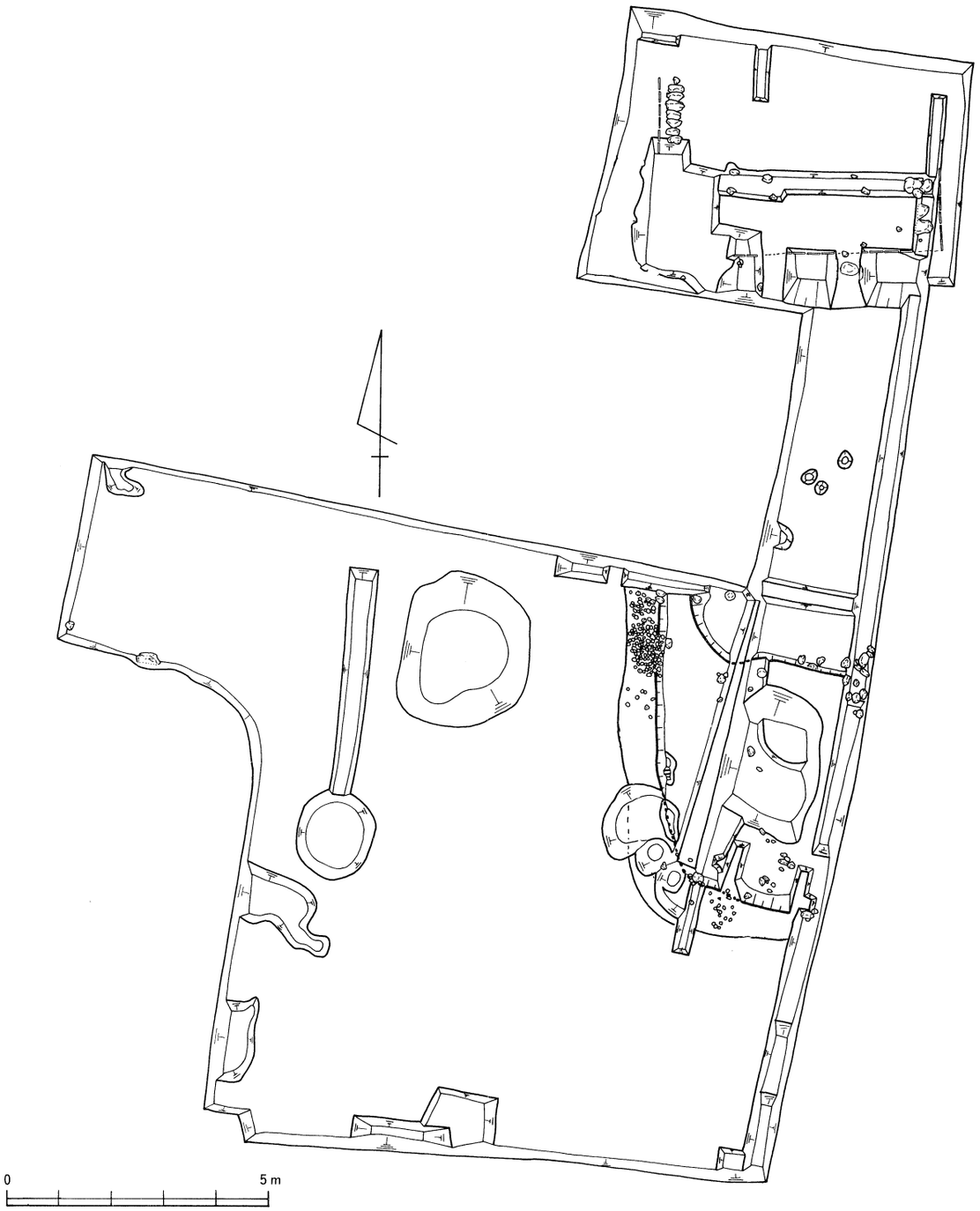


1　表土及び撹乱。
2　10YR 4/3　にぶい黄褐色粘質土。(炭若干含む。)
3　10YR 4/4　褐色粘質土。5mm～1cm大のレキ若干含む。
4　10YR 5/3　にぶい黄褐色粘質土。3cm大のレキ及び炭、遺物若干含む。
5　10YR 5/6　黄褐色粘質土。粒子細かい。φ3cm以下のレキ含む。
6　2.5Y 5/4　黄褐色粘質土。粒子が細かく、しまっている。
7　10YR 5/4　にぶい黄褐色粘質土。2cmの大のレキ含む。
8　10YR 4/3　にぶい黄褐色粘質土。粘質大φ1cmのレキわずかに含む。
9　10YR 4/4　褐色粘質土。炭、遺物を微量に含む。
10　7.5Y 7/2　灰白色粘質土。炭、遺物を微量に含む。(粘土に近い。)
11　10YR 3/4　暗褐色粘質土。φ1cmのレキ、炭含む。
12　10YR 4/6　褐色粘質土。
13　10YR 4/6　褐色粘質土。
14　10YR 4/3　にぶい黄褐色粘質土。4cm大のレキ含む。
25　10YR 6/3　にぶい黄橙色粘質土。3cm大のレキ含む。
26　10YR 5/3　にぶい黄褐色粘質土。2cm大のレキ含む。
27　10YR 6/4　にぶい黄橙色粘質土。炭微量含む。
28　10YR 4/3　にぶい黄褐色粘質土。
29　10BG 7/1　明青灰色粘質土。(10YR 6/8のブロック含む。)
30　10YR 4/4　褐色粘質土。粒子少し粗い。
31　7.5YR4/4　褐色粘質土。炭微量に含む。
32　7.5YR4/3　褐色粘質土。2cm大のレキ含む。
33　5BG 6/1　青灰色粘質土。粒子粗く砂質に近い。(しまりがない。)
34　2.5Y 6/4　にぶい黄色粘質土。粒子少し粗い。

15　10YR 4/3　にぶい黄褐色粘質土。粒子細かく砂利多い。
16　2.5Y 5/4　黄褐色粘質土。砂利多い。
17　10YR 2/2　黒褐色粘質土。
18　10YR 3/4　暗褐色粘質土。
19　10YR 6/3　にぶい黄橙色粘質土。2cm～3cm大のレキ若干含む。
20　N 6/1　灰色粘質土。4cm大のレキ含む。
21　2.5Y 5/4　黄褐色粘質土。粒子細かい。
22　10YR 6/4　にぶい黄橙色粘質土。炭微量含む。
23　2.5Y 5/3　黄褐色粘質土。粒子細かく、しまっている。
24　10YR 5/4　にぶい黄褐色粘質土。炭微量含む。

0　5m

第6図　東壁土層図

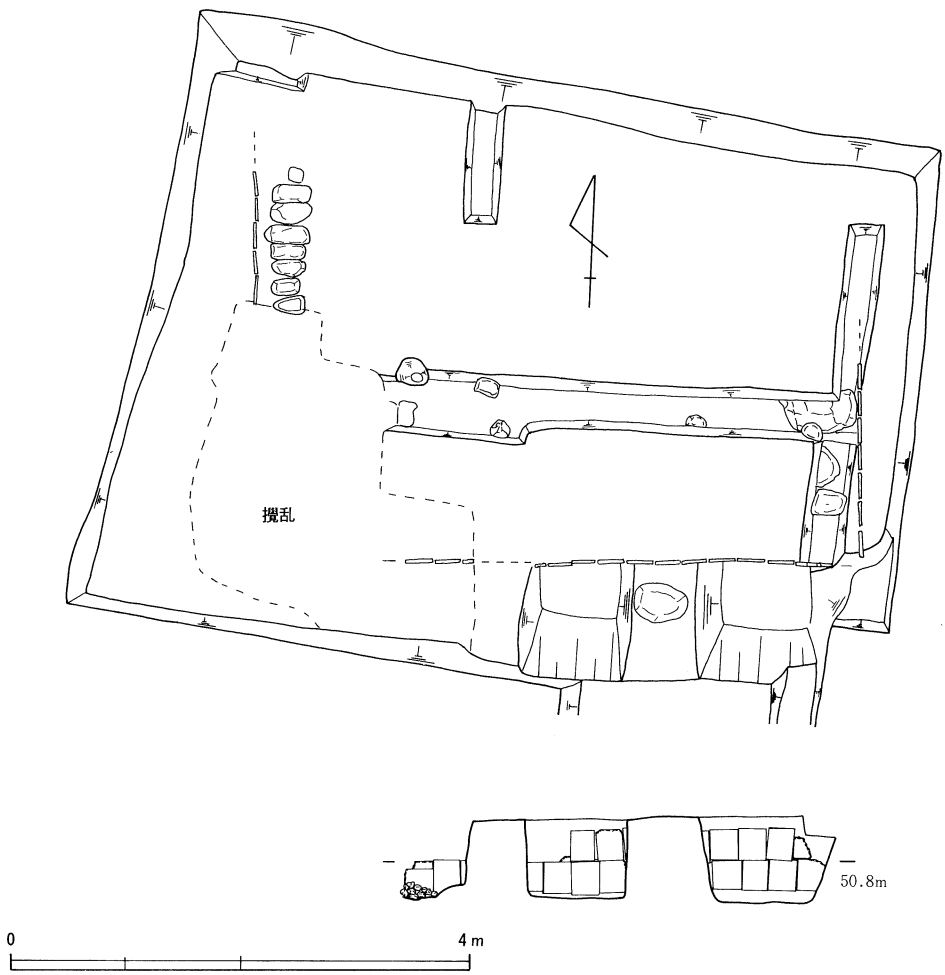


第７図　調査地全体図

a．基本層序

池田城跡主郭部は昨年度までの発掘調査の結果、炭層が西側から中央部にかけて5層、東側では4層確認されている。また、整地層は4層で、地山面を含めると遺構面は5面を数えることが判明している。

今回の調査で確認した層序は、主郭中央部の層序と若干異なり、炭、焼土も少なく、整地層も明瞭ではない。これは、本調査地が主郭南西隅で、居住性よりも防御性に重点がおかれていたことと関連すると考えられる。層序の概要は次のとおりである。第1層は近世遺物を含むにぶい黄褐色粘質土、第2層は褐色粘質土、第3層はにぶい黄褐色粘質土、第4層は灰色粘質土の整地層で、一部上層に炭が広がる。この面より、塀列建物、土塁を検出した。第5層は褐灰色粘質土、第6層はにぶい黄褐色粘質土の整地層で北側端では上層に炭が広がる。この面より古い段階の土塁を検出した。第7層はにぶい黄褐色粘質土で礫を多く含む、第8層は黒褐色粘



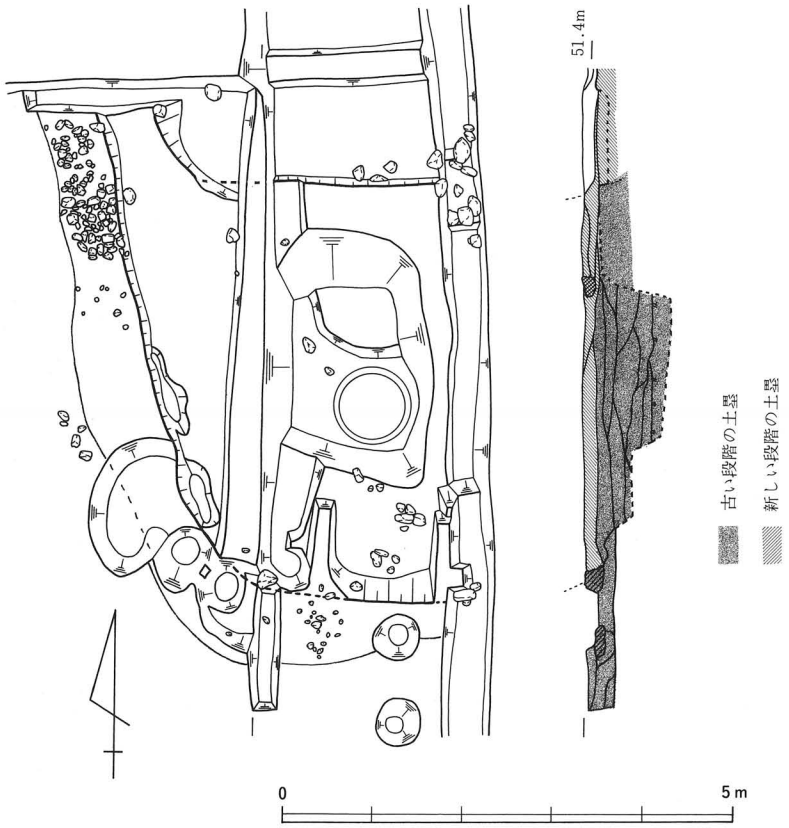
第8図　塀列建物 平・立面図

質土でわずかに炭を含む、第９層は褐灰色粘質土で地山と思われる。第７層以下は北側撹乱壁のみで確認したもので、基本層位になるかどうかは判断しがたい。

ｂ．検出遺構

埴列建物

埴列建物は調査地北側に位置し、第４層から検出した。主軸はほぼ真北を向く。埴列は南、東、西面を検出し、東西の幅は5.7ｍである。埴を積むための掘り方は建物の外回りにあり、掘り方の幅は南面90㎝、東面50㎝を数える。調査は北側の掘り方だけを掘り、埴の立面状況を観察した。現状では、埴は内法面に２段積まれており、一部上段の埴が抜き取られているためか、ないところもある。埴列建物内部は、上層に床土と思われる厚さ約10㎝の黄色粘土が敷かれており、そして、その下には砂礫を多く含む厚さ約10㎝のにぶい黄橙色の粘質土が敷かれている。また、その２層の間に最大の厚さ７㎝のシジミを主体とする貝層が挟まれている。貝層は建物の中央部にはなく、南東側に多く広がり、東側においては礎石と考えられる石列まで広がっている。上記した土層が埴列建物の内部を構成する土層と考えられる。尚、これらの層より下にも焼土層等が見られるが、それらは埴列建物以前の堆積層と考える。



第９図　土塁平・断面図

礎石は確認されたかぎり、塀列東面南端に3個、西面に5個並ぶ。東面の礎石は建物内部の黄色粘土層に覆われる形で検出した。また、黄色粘土は南、東側では塀列の上にも覆いかぶさるように広がっている。黄色粘土上において、柱、または、横木の痕跡は認められなかった。検出した礎石以外の礎石は、黄色粘土の下に存在する可能性がある。

北側には塀列は確認できなかったが、黄色粘土は広がっているため、塀列あるいは、礎石は北側にも伸びているものと想定される。

土塁

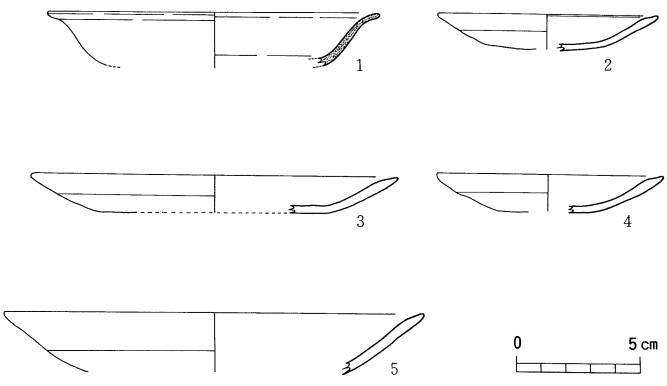
調査区南端から逆L字形をした土塁を検出した。後世の削平により、土塁は痕跡を僅かに残すのみで本来の高さは不明である。東壁の断ち割り調査などで、土塁は改修が行われていることが判った。古い段階の土塁は第6層ベースとする。その土塁の内側には高さ30㎝、南北の長さ5ｍのテラスを設けている。そのテラスは堅くしまった黄褐色土で構成される。テラスの裾には人頭大の石が多く点在することから、石列の存在が想定できる。土塁の幅は南の崖面からは約10ｍを測る。土塁の裾にも石列を設けていたと思われるが、現状では石列に伴う裏込め跡と人頭大の石が僅かに残るのみである。新しい段階の土塁は第4層をベースとする。古い段階のテラスの裾部分とほぼ同じ位置から、上へ上がる黄色粘土層を確認した。しかし、後世の削平のため、その土層は土塁の立ち上がりをしめすラインか、または、古い段階のように一旦、平坦部を設けるためのラインかどうかは判断できない。

c．出土遺物

遺物は主として、塀列建物、第4層から出土している。そのほとんどは土師皿で、まれに、中国製磁器、国産陶器が出土した。以下、主だった遺物を紹介する。

塀列建物出土遺物

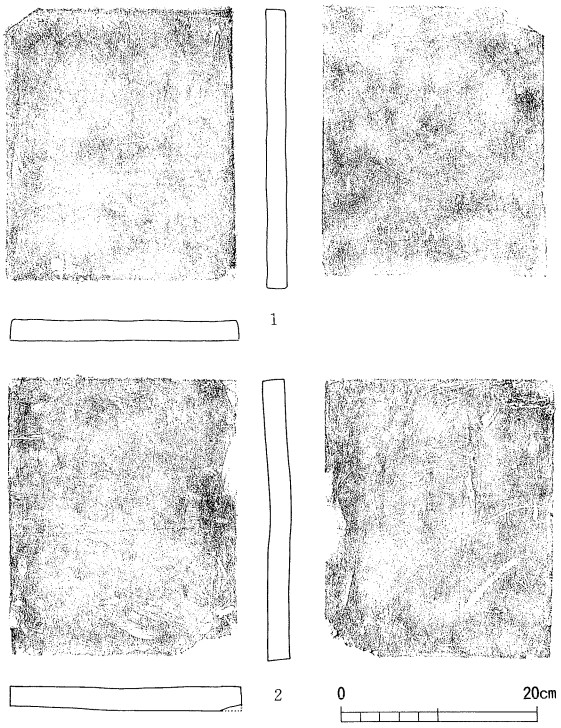
1と3は塀列建物内貝層から出土したものである。1は口径114㎜を測る中国製白磁皿で、口縁部端は外反する。3は口径148㎜を測る土師皿で口径に対して器高は低く、内面は見込みの部分を一定方向のナデ、口縁部への立ち上がり部分から外面上半をヨコナデを施し、外面下半から底部は指押えを施している。2と4は塀列建物内上層の黄色粘土から出土した土師皿で、口径は90㎜、92㎜を測る。とも



第10図　塀列建物出土遺物

に内面から外面上半はヨコナデを施す。また、2の底部は指押えで、4の底部はナデを施す。5は塼を積むための掘り方内から出土した土師皿で、口径170㎜を測る。内面から外面上半にかけてヨコナデ、外面下半は指押えを施す。

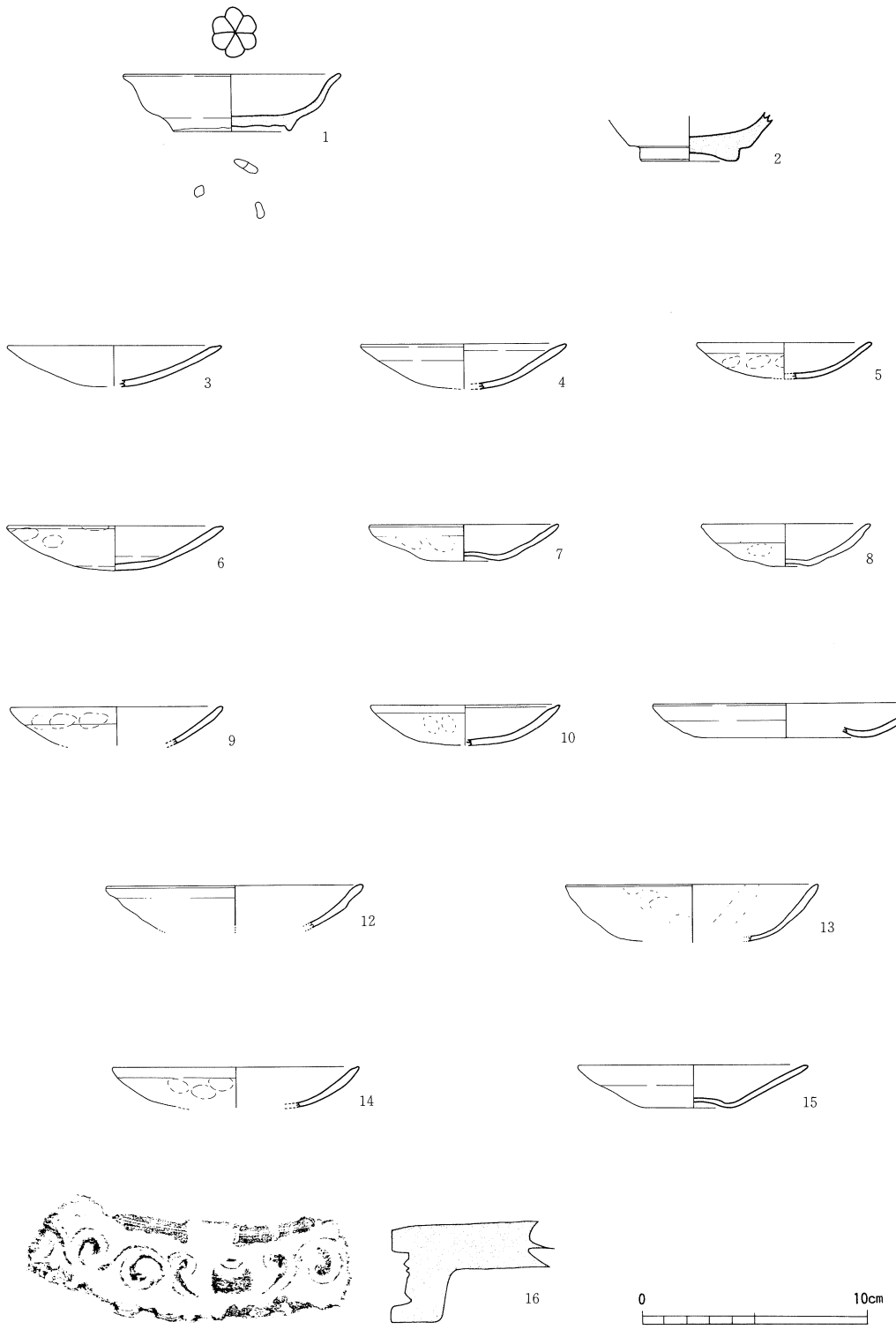
塼のうち、完形は2点である。1は長辺279㎜、短辺231㎜、厚さ20㎜、2は長辺284㎜、短辺235㎜、厚さ20㎜を測る。2つとも焼成は良くなく、部分的に赤色化する所もある。また、一部ナデ、ヘラで調整する所も見られる。



第11図　塼

第4層出土遺物

1は瀬戸・美濃製緑釉皿で内面見込みに印花文が、また、底部にはトチン跡が見られる。2は瀬戸・美濃製天目茶碗で内面には鉄釉がかけられ、外面は残存する限りでは釉は認められないが、底部まで塗鉄は認められる。3～10は口径100㎜以内を測る小型の土師皿である。3～6、8、10は底部からなだらかに口縁部に至る器形である。3は摩耗のため調整は不明であるが、4、5、8、10は内面から外面上半にかけてヨコナデを施し、外面下半を指押えを施している。6は内外面ともナデを施している。7は上げ底状の底部を有する器形である。調整は内面から外面上半はヨコナデ、外面下半は指押えを施している。9は詳しい器形は不明である。調整は内面から外面上半にかけてヨコナデを施し、外面下半は指押えを施している。11～15は口径102㎜～118㎜を測る中形の土師皿である。11は底部が上げ底状に隆起している。調整は内面から外面上半はヨコナデ、外面下半は指押えを施している。12は口縁部のみ残存する。調整は内面はヨコナデ、外面は指押えを施している。13、14は内弯ぎみの器形をしている。ともに、調整は内面から外面上半はヨコナデ、外面下半は指押えを施している。15は底が少し上がりぎみで、口縁部は直線的に立ち上がる。調整は内面底部は一方方向のナデ、内面立ち上がり部から外面上半はヨコナデ、外面下半から底部は指押えを施している。また、内面立ち上がり部分からナデを引き上げた跡が見られ、13にも一部同様の調整が見られる。16は軒平瓦で、中心飾りは宝珠文、脇文様は唐草文を用いている。顎面、平瓦上部、下部は横にナデを施している。また、上端部の面取りが施されている。



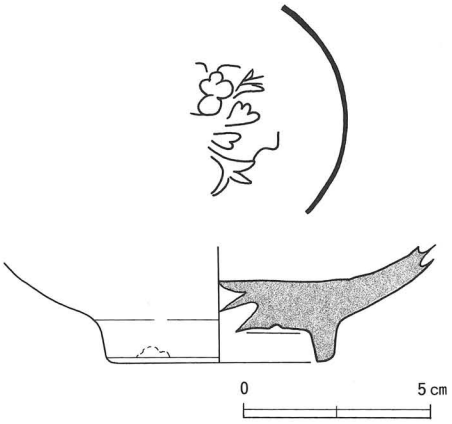
第12図　第４層出土遺物

その他の遺物

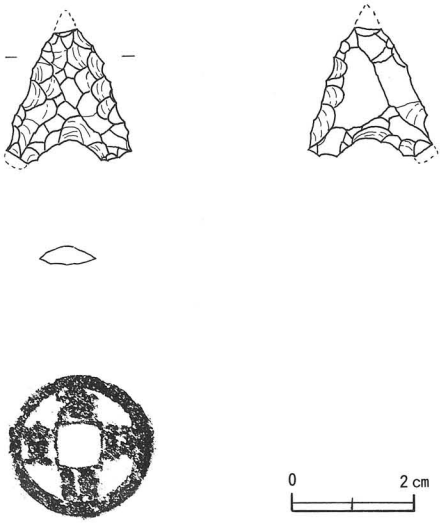
中国製青磁碗　表土採取遺物である。内面見込みには、一条の罫線が見られ、また、その内側にはスタンプ文が認められる。外面は残存のかぎり、無文である。畳付から高台内は露胎である。

石鏃　土塁内の埋土から出土した凹基無茎式の石鏃で長さ22㎜、最大幅21㎜、厚さ４㎜を測る。図左面は中央部から細かい剥離で調整しているが、図右面は端部を剥離で調整しているのみである。

銅銭　第４層から出土したもので、元祐通宝と考えられる。



第13図　中国製青磁碗



第14図　石鏃・銅銭

ｄ　まとめ

塀列建物について、２段以上塀が積まれていること、貝が敷かれていること、礎石が列をなしていることから、蔵と考えられる[1)]。しかしながら、礎石に関しては、調査上、部分的に確認できたのみである。東側の礎石列は北側延長上において礎石抜き取り跡を確認できず、北へ伸びるかどうかは不明であり、部分的に存在した可能性もある。また、西側の礎石列は床と思われる黄色粘土に覆われる形で検出され、黄色粘土上からは柱跡等の痕跡が認められなかったことは不可解である。しかし、黄色粘土上に横木を置きその上から柱を据えたとも考えられる。なお、東側の礎石列は長方形の石で構成されるが、西側の礎石列は円形の石で構成される。そのことは、上部構造の違いからなるとも考えられる。

調査では、塀は２段積まれていることが確認できた。しかしながら、建物の床と考えられる黄色粘土は２段目の塀上端よりレベルが高く、内面から塀に覆いかぶさるような状況を示していた。このことから、もともと、塀は３段以上積まれていて、塀内にも黄色粘土を敷いていたとも考えられる。そう考えると、３段目以上は地上に露出し、壁面の下部をなしているか、基壇の形態をとっていたことも想像される。しかし、それは黄色粘土の検出状況のみの考えである。時期については第４層から検出されたことにより、池田城最終段階、概ね16世紀後半と考える。また、新しい土塁の時期についてもそのことが考えられる。但し、土塁の改修時期、古

い段階の土塁の存続期間、古い段階以前の状況については不明であり、これまでの主郭部の調査結果を十分参考にして考える必要がある。

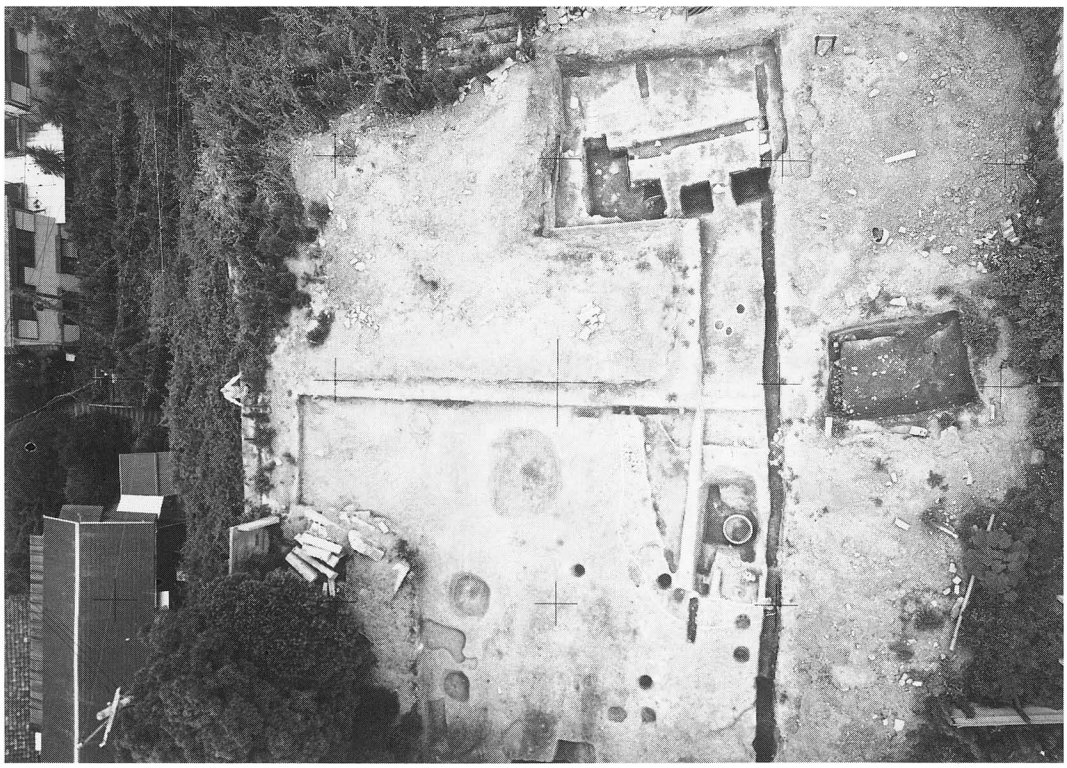
注 (1) 土山健史「塀列建物について」『近世都市の構造　発表要旨』関西近世考古学研究会1991年
土山健史「塀列建物について」『関西近世考古学研究Ⅲ』1992年

参考文献

堺市教育委員会『堺市文化財調査第20集』1984年
堺市教育委員会『堺市文化財調査第35集』1987年
堺市教育委員会『堺市文化財調査概要報告8冊』1990年
堺市教育委員会『堺市文化財調査概要報告14冊』1991年

図版一　池田城跡主郭部

(1)　池田城跡航空写真（南から）



(2)　池田城跡主郭部調査地全景

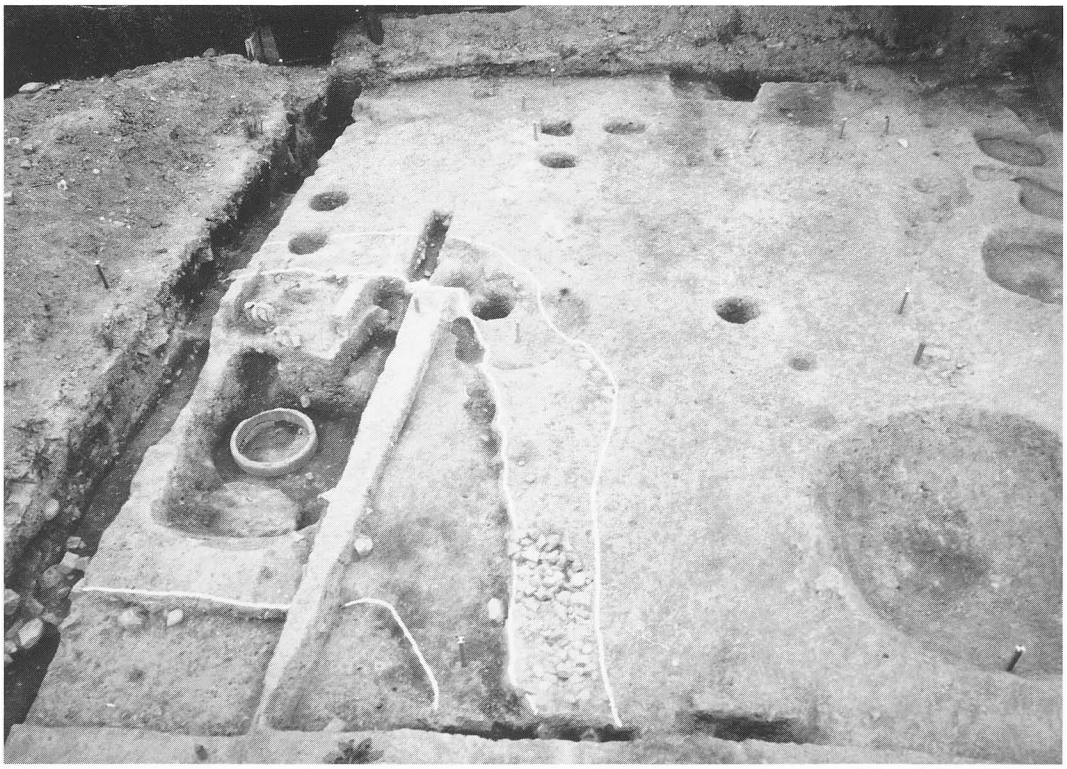
(1)　塀列建物（南から）

(2)　塀列建物（南東から）

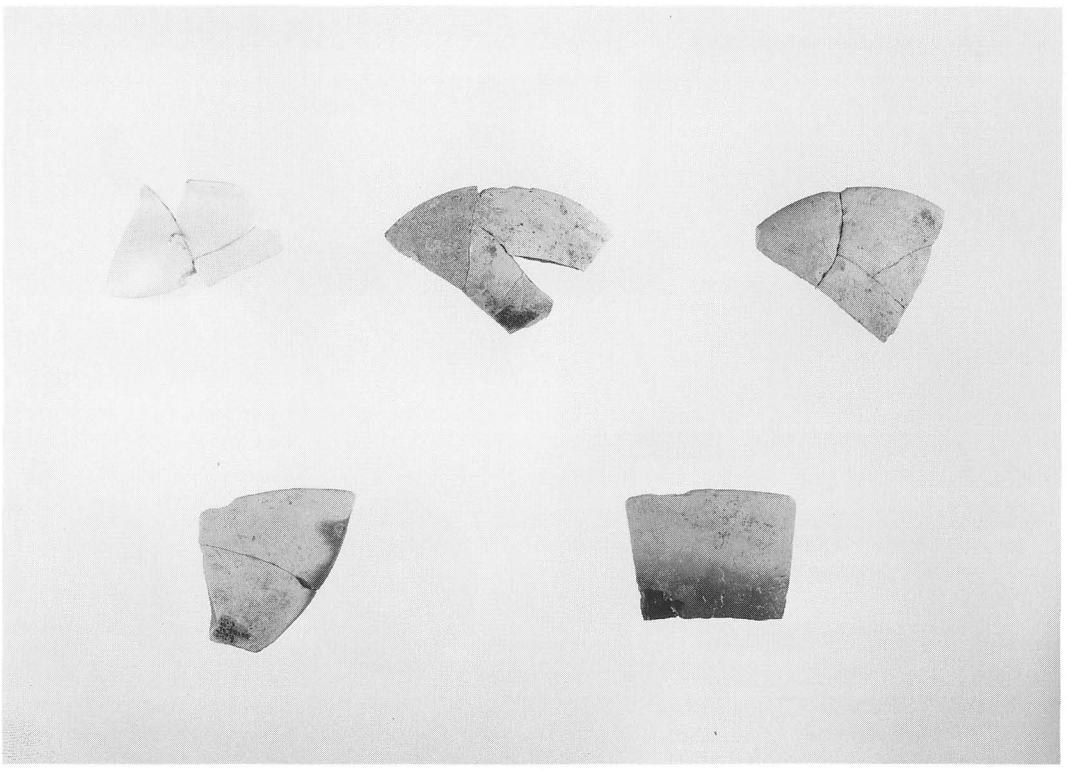
図版三　池田城跡主郭部

(1)　塹列断面

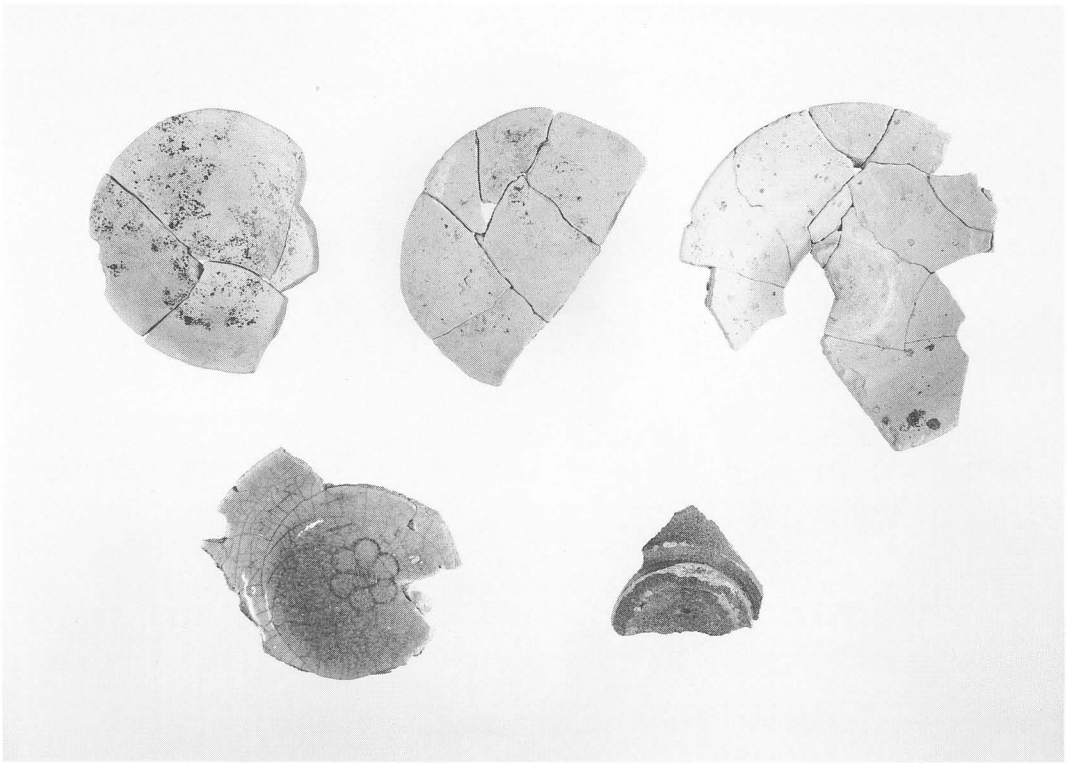
(2)　塹列建物内土層断面



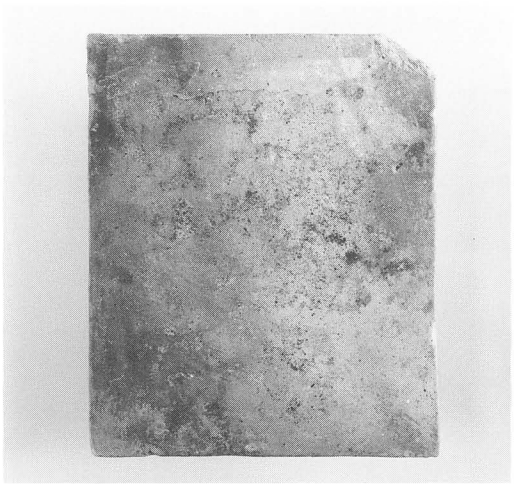
(1)　土塁（北から）

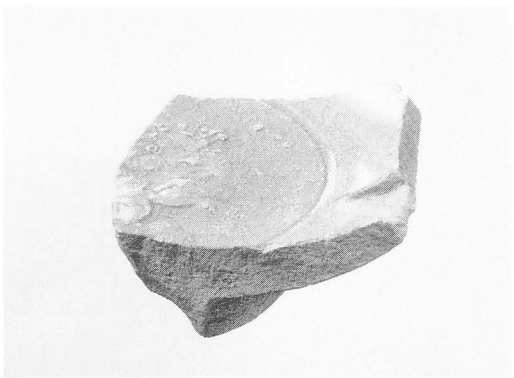


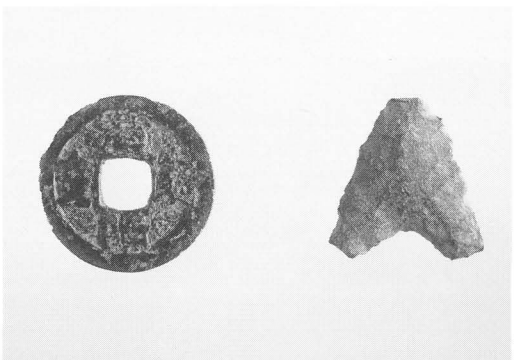
(2)　塀列建物出土遺物



(1)　第４層出土遺物







(2)　塼、軒平瓦、青磁、銅銭、石鏃

池田城跡第27次発掘調査
宮の前遺跡第28次発掘調査

例　　言

1．本章は、平成４年度に実施した個人住宅建築に伴う発掘調査の概要報告である。

2．本年度の調査、および、期間は下記のとおりである。

池田城跡第27次	池田市建石町1936－１、３	平成４年７月13日～８月７日
宮の前遺跡第28次	池田市石橋４－122 －２	平成４年９月14日～９月17日

3．調査は、本市教育委員会教育部社会教育課が実施し、中西正和が現地を担当した。

4．調査にあたっては、野村大作、加賀美樹、正岡克己、志田原国博、森本陽二郎が参加した。

5．施主の塩野芳彦氏、木村純司氏には発掘調査の実施について、ご理解、ご協力をいただいたことに対し、深く感謝いたします。

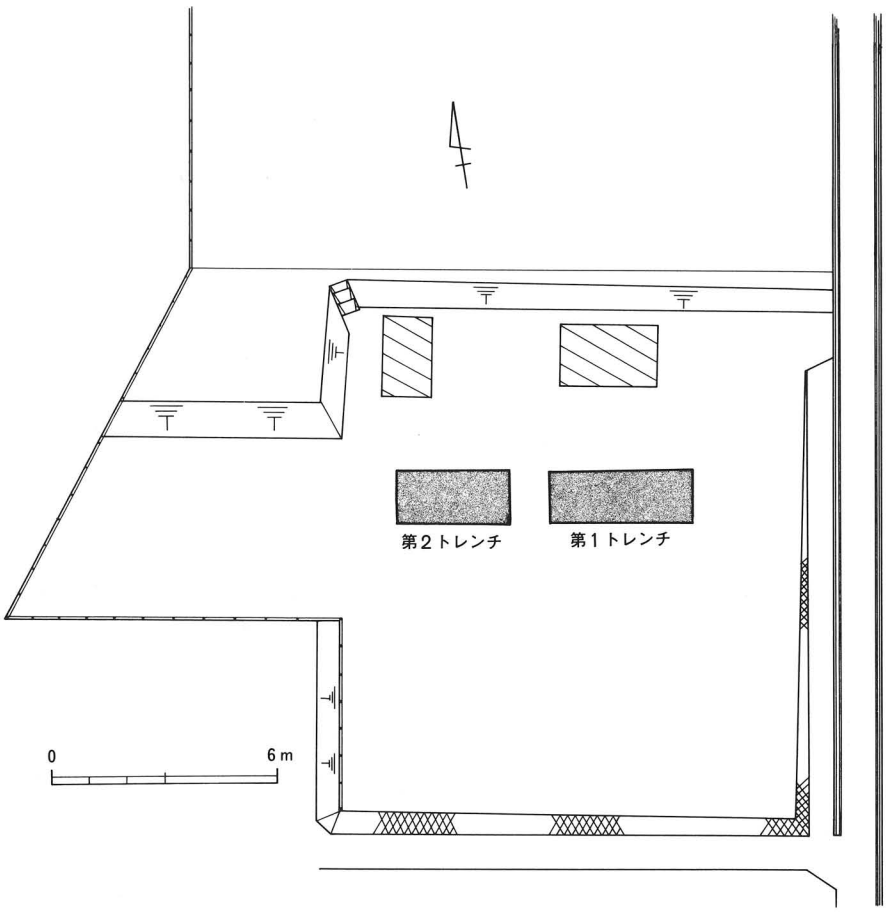
1．池田城跡第27次発掘調査

調査地は池田市建石町1936－1、3に位置する。試掘の結果、敷地の北側は盛土が浅く、工事による影響があるため、その範囲を対象に発掘調査を実施した。東側の調査区を第1トレンチ、西側の調査区を第2トレンチと称する。工事の基礎の関係上、地山確認はトレンチの北側に側溝を設定し行った。調査面積は約100㎡である。

調査の概要

a　基本層序

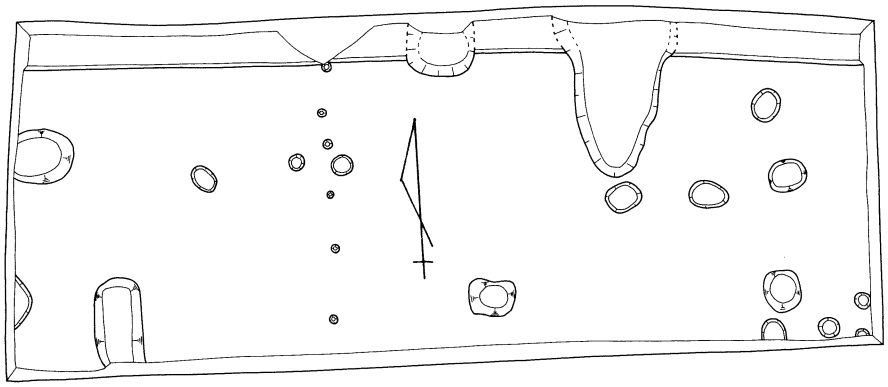
基本層序は第1層は表土、第2層は近世以降の遺物を含むにぶい赤褐色粘質土、第3層は整地層と思われる黒褐色粘質土で、西へ行くにつれて厚さは薄くなり、第2トレンチでは確認で



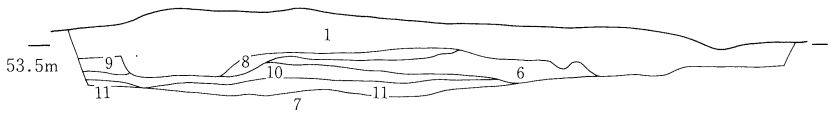
第15図　トレンチ位置図

第1トレンチ

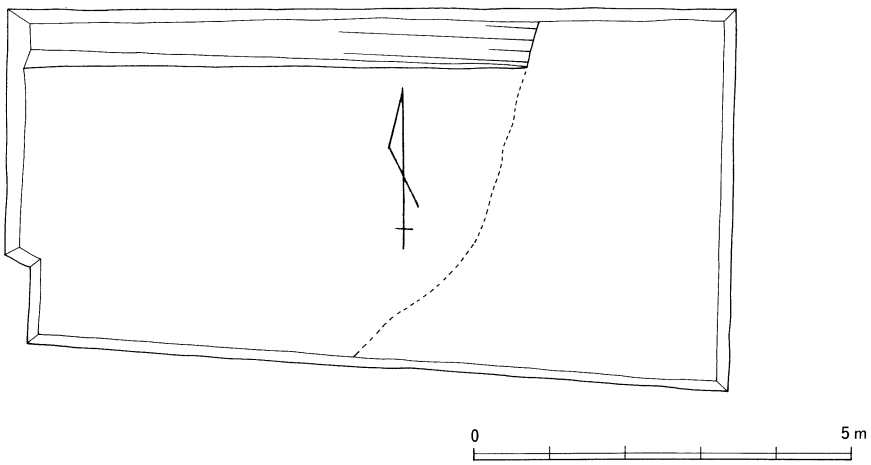
1．盛土　　2．7.5YR 4/6　にぶい橙粘質土　　3．5YR 3/5　にぶい赤褐色粘質土（第2層）
4．10YR 3/4　にぶい黄褐　粘質土　　5．10YR 2/3　黒褐粘質土（第3層）
6．7.5YR 3/5　にぶい褐色粘質土（第2層）　　7．10YR 2/3　黒褐粘質土（レキ多）(地山)



第2トレンチ



1．上記1に対応　　6．上記6に対応　　7．上記7に対応
8．5YR 4/3　暗オリーブ色粘質土　　9．5YR 4/3　暗オリーブ色粘質土（しまりのない土）
10．2.5Y 4/1　黄灰色粘質土　　11．5YR 1.7/1　黒色粘質土



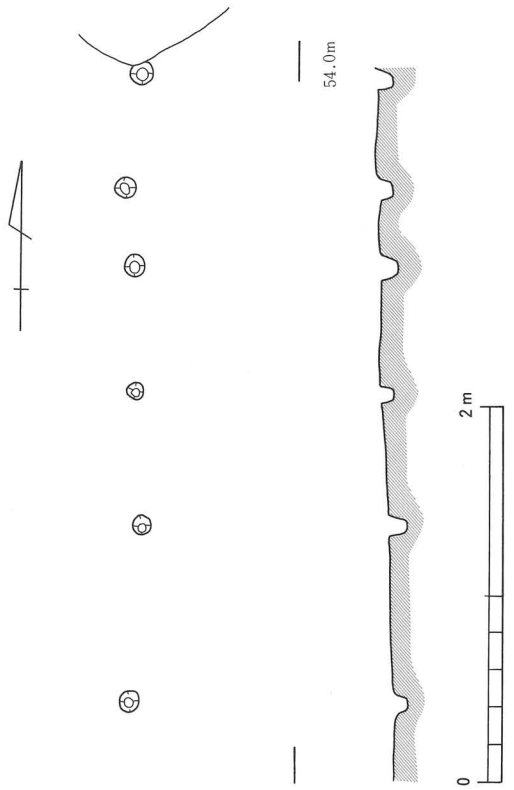
第16図　第1・2トレンチ平・断面図

きなかった。第4層は砂礫を多く含む黒褐色粘質土の地山である。調査の検出面は第3層である。

b　検出遺構

杭列

杭列は第1トレンチの中央から検出されたもので南北方向へ6基走り、磁北に対しほぼ北に向く。杭の大きさは直径5～6㎝、深さ5～11㎝で、杭の間隔は不規則で、最長のもので96㎝、最短のもので40㎝である。杭列に伴う遺構は検出されなかった。



第17図　杭列

落ち込み

落ち込みは第2トレンチで検出されたもので、西へ続く。落ち込みの深さは10㎝前後と浅く、また底は平坦であり、そのことから、西へ緩く落ちる段というべき遺構である。しかし、この遺構の西方には、東西に走行する堀を確認しており、あるいは、堀と関連するものかもしれない。埋土からは17世紀後半の肥前系磁器が出土しており、そのころには埋没したと思われる。

c　出土遺物

第1トレンチ

第1トレンチの遺物は、第2層、第3層から出土している。その殆どは細片化し、図化し得たのは7点のみであった。

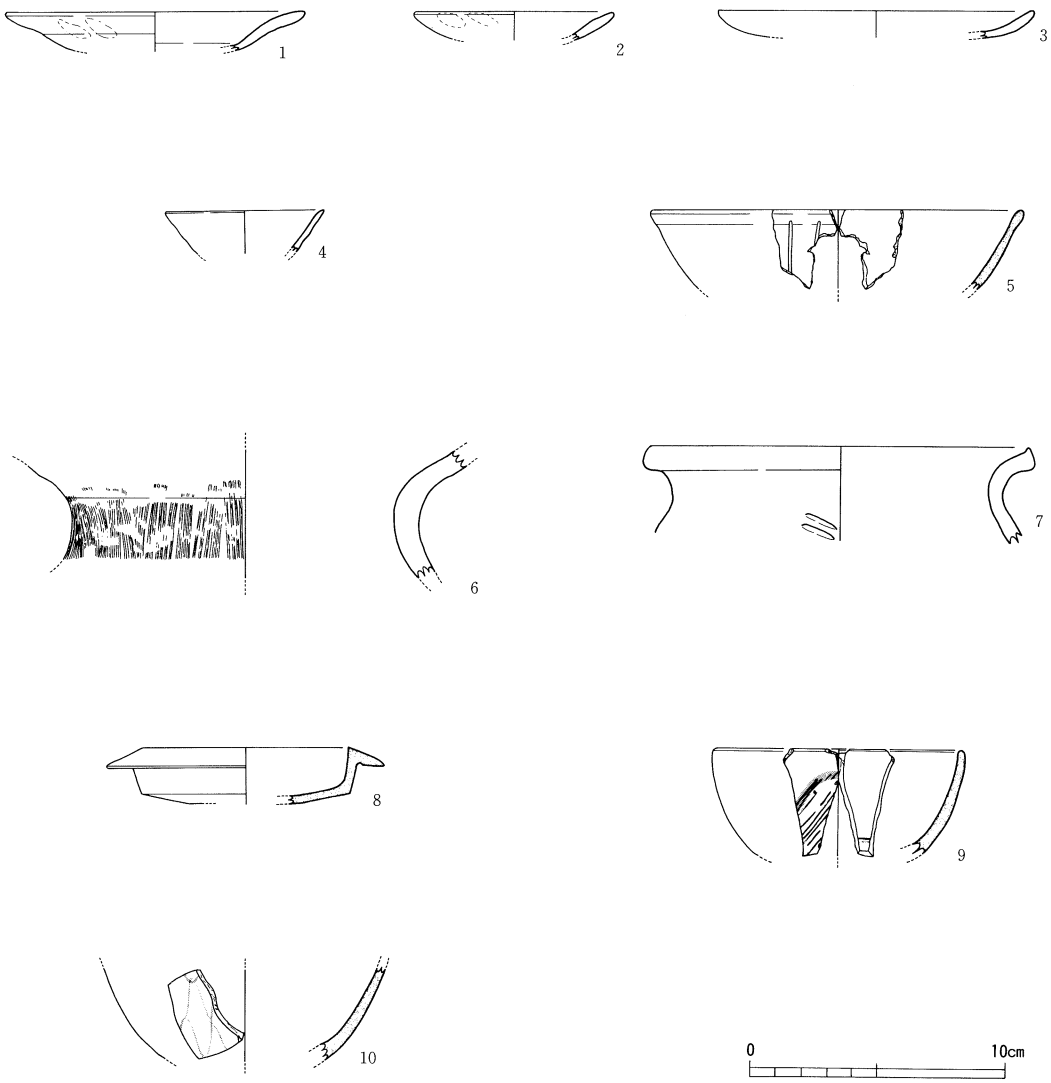
1、2、3、4は共に第3層上面から出土した土師皿である。1は、12㎝前後の口径で、口縁部は外反する。整形は内面と外面上半にヨコナデ、外面下半はナデを施す。また、外面には連続した指圧痕がみられる。2は8㎝前後の口径をはかる。内外面ともナデを施す。3は、12㎝前後の口径で、外・内面ともヨコナデを施す。4は口径が6㎝前後の土師皿である。5は第2層から出土した中国製青磁碗で、口径は15㎝前後をはかる。外面には剣頭を省略した蓮弁文と思われる細文が施されている。釉はくすんだ緑色を呈している。6、7は弥生土器である。

6は頸部と思われ、内面、外面ともにハケメを施す。7は甕の口縁部で摩耗のため詳しい調整は不明だが、わずかにタタキ痕が見られる。

第2トレンチ

第2トレンチから出土した遺物で図化できたのは、信楽系陶器1点と肥前系磁器2点のみであった。共に、落ち込みの埋土内からである。

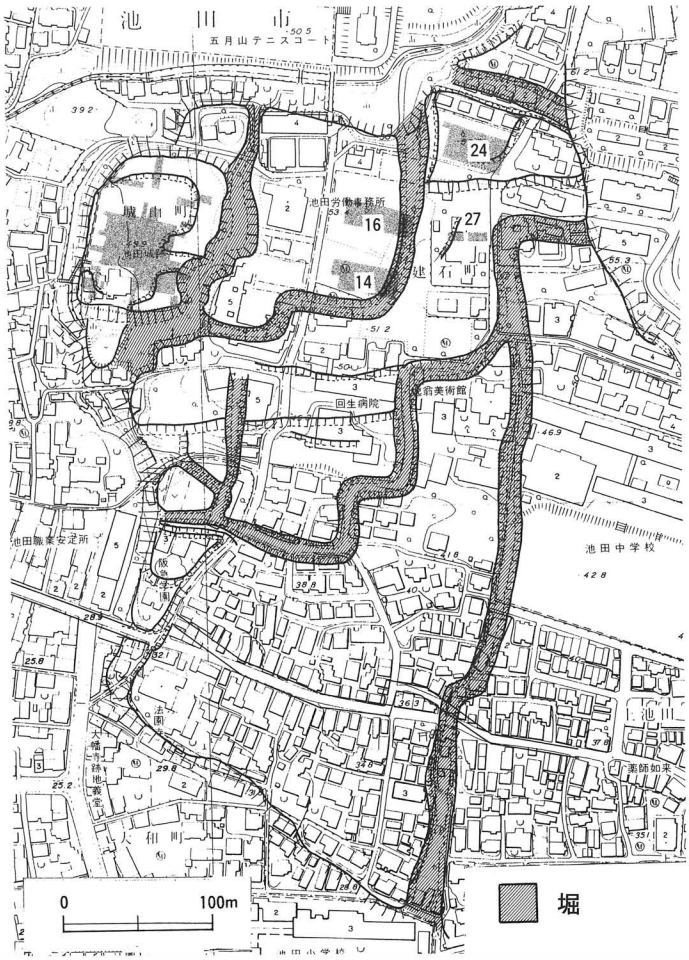
8は径11cm前後の信楽系陶器の蓋である。上面は緑色の釉を施すが、下面は露胎である。内面中央は把手が付くと思われるが、欠損している。9、10は肥前系磁器の碗である。9は口径10cm前後を測る。外面に丸窓、内面見込みに2条の罫線が描かれている。10は、口縁、高台を欠損している。外面に一重網目文が描かれているほかは、文様は見当たらない。



第18図　出土遺物

d　まとめ

調査では、杭列、落ち込み等が検出されたものの、建物跡は検出されなかった。落ち込みについては、本調査地は主郭部から約３ｍ高い位置にあり、城を整備する上で、主郭へ連なる平坦部をつくったと思われる。しかし、造成時期について、出土遺物が少量のため不明である。



第19図　池田城跡復元図

とどまった。そのことから、本調査地が位置する曲輪は、居住性を伴わなく、駐屯地的性格が強いと思われる。しかしながら、断定はできず、今後の調査や他の城郭からの判断が必要である。

2．宮の前遺跡第28次発掘調査

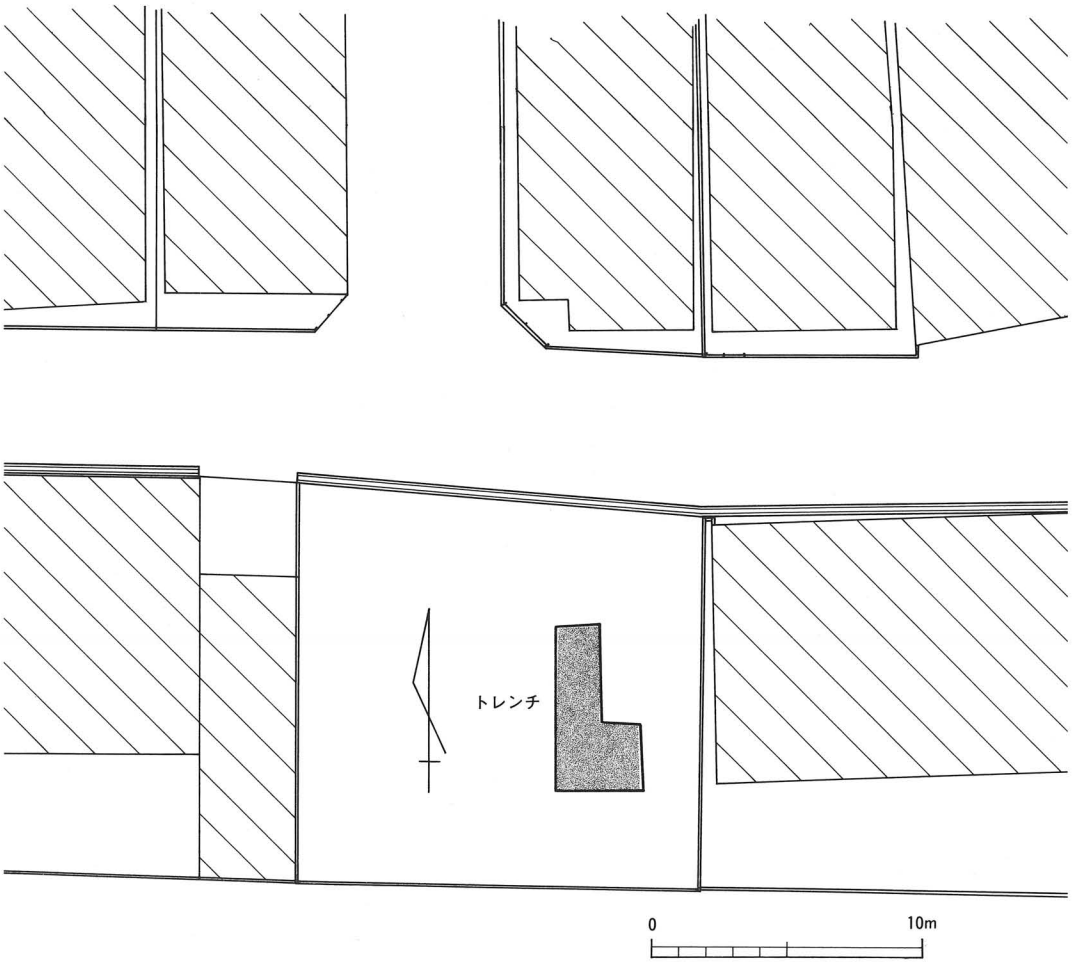
宮の前遺跡の概要

宮の前遺跡は池田市石橋４丁目、住吉１・２丁目、豊中市蛍池北町に広がる旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。その場所は、待兼山の丘陵より西方へ発達した標高約30ｍの洪積台地に立地している。この台地は、猪名川によって形成された沖積平野とは約10ｍの比高差を有する。周辺の遺跡としては、南方に豊島南遺跡、弥生土器、須恵器が採取された住吉宮の前遺跡が位置し、西方に高地性集落と考えられる待兼山遺跡、須恵器、瓦を生産した桜井谷古窯跡群が広がり、また、南方に当遺跡と同一の性格を有する蛍池北遺跡、５世紀の掘立柱建物跡が検出された蛍池東遺跡[1]、国府型ナイフ形石器が出土した蛍池西遺跡[2]等が挙げられる。

第20図　調査地位置図

当遺跡は、昭和の初頭に地元の人々により石器や土器などが採取され、世に知られるようになったが、本格的な調査が行われておらず、遺跡の性格等は不明であった。しかし、昭和43、44年の中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査が実施され[3]、その結果、弥生時代中期の方形周溝墓、竪穴式住居跡、土壙墓等の他、古墳時代の竪穴式住居跡、古墳跡が検出された。特に、当時検出例が少なかった方形周溝墓が多く検出されたことから、住居域と墓域が同時に把握できる貴重な例として注目を浴びることとなった。また、奈良時代の掘立柱建物跡、井戸、平安時代の掘立柱建物跡等も確認され、弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡として認識されるようになった。

その後、大阪府教育委員会、豊中市教育委員会、池田市教員委員会により、マンション等の開発に伴う事前調査で、遺跡の範囲も東西700m、南北900mと拡大している。また、昭和61年度の大阪府教育委員会による調査、平成元年度の豊中市教育委員会による調査で、国府型ナイフ形石器が出土し[4]、当遺跡が旧石器時代までさかのぼることが判明している。



第21図　トレンチ位置図

註　(1)　㈶大阪文化財センター『蛍池東遺跡現地説明会資料』1992年
(2)　豊中市教育委員会『摂津豊中　大塚古墳』1987年
(3)　宮之前遺跡調査会『宮之前遺跡発掘調査概報』1970年
(4)　豊中市教育委員会『蛍池北遺跡現地説明会資料』1989年

参考文献
橘高和明『原始古代の池田』池田市立池田中学校地歴部1985年
富田好久「考古学上に現れた池田」『新版池田市史』概説篇1971年

調査の概要

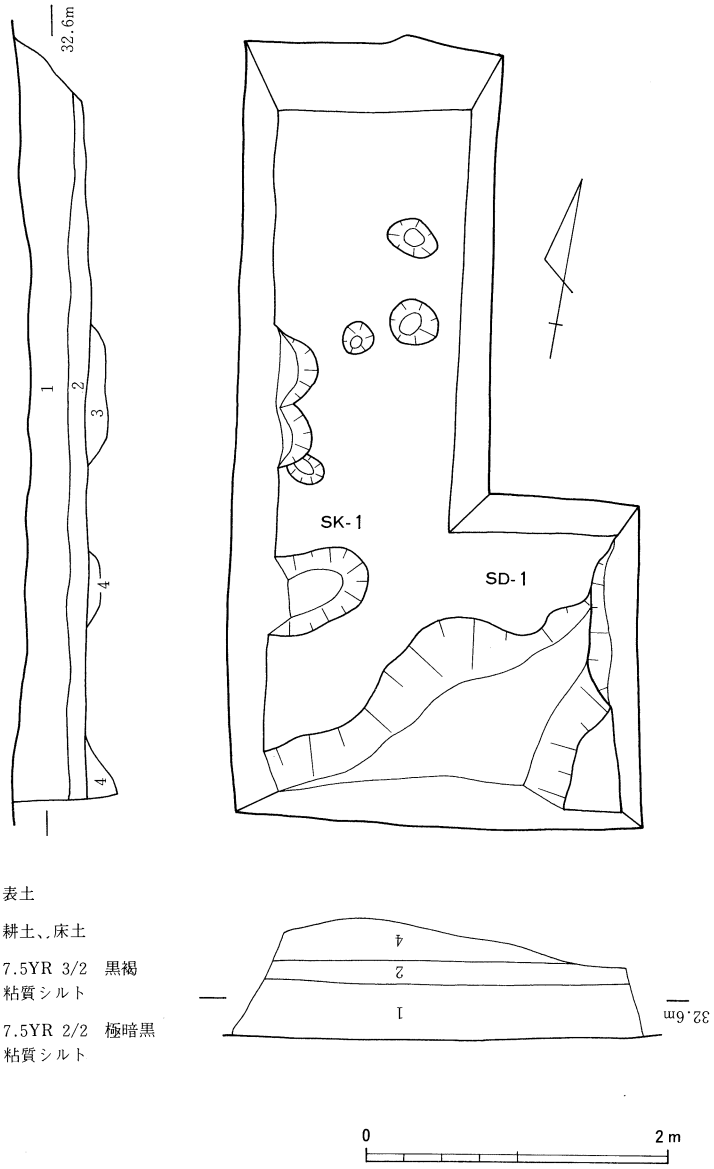
調査地は池田市石橋４丁目122－２に位置する。調査は個人住宅新築に伴い実施されたもので、調査面積は約10㎡である。調査当初は２ｍ×４ｍのトレンチで調査を行ったが、調査区南側から東へ伸びる溝を検出したため、一部調査区を東へ拡張した。

a　基本層序

層序は３層からなる。第１層は盛土、第２層は耕土及び、それに伴う床土、第３層は遺構検出面の黄褐色粘質土の地山である。層序は以上で、本調査地では包含層は確認できなかった。

b　検出遺構

検出した遺構は、溝、土坑、ピットである。



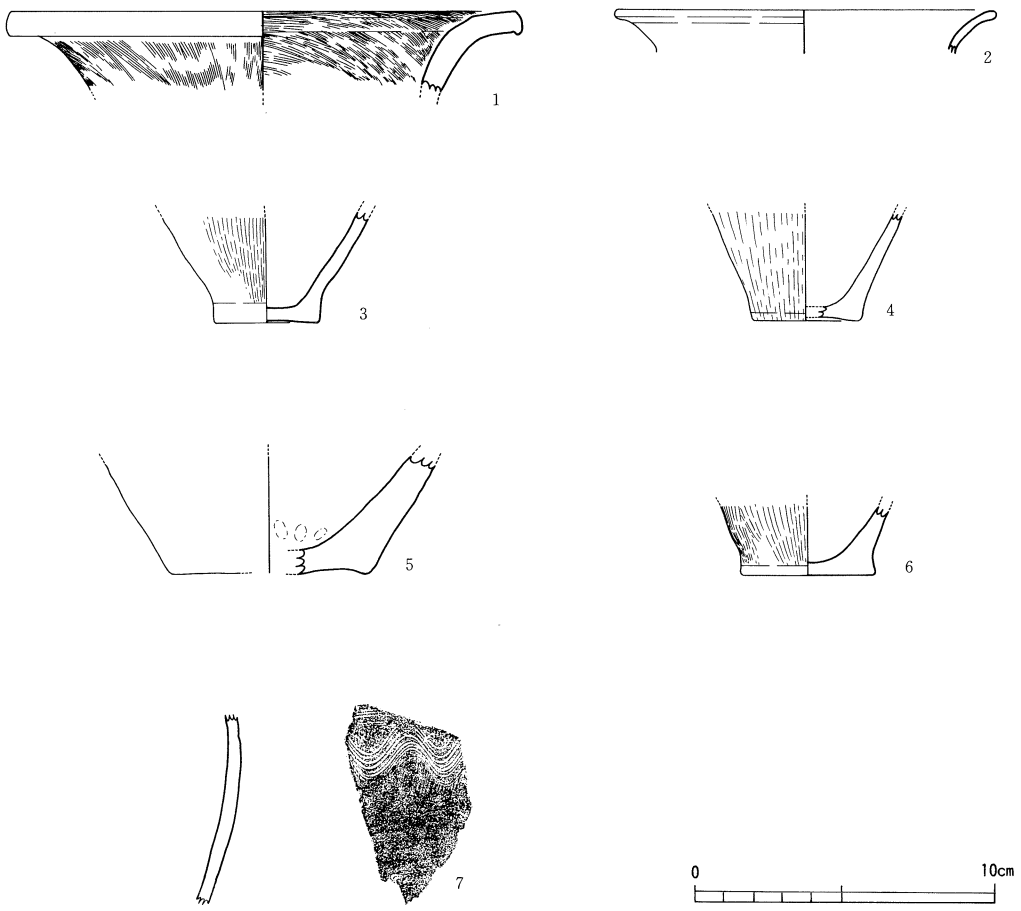
第22図　トレンチ平・断面図

SD－１

調査区南端から検出したもので、南西から北東へ伸びる。最大幅1.5m、最深部0.2mを測る。出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。底面のレベルは北から南へ概して深くなっているが、SD－１の東北部分は急に落ちこむ。そのことから、SD－１と北東の落ち込みは別の遺構とも考えられるが、土層において、切り合いは認められなかった。

SK－１

調査区中央から検出したもので、西側は調査区外に伸びる。最大幅0.25m、最深部0.2mを測る。出土遺物は弥生土器片１点だけであった。そのことから、弥生時代の遺構と考えられるが、遺構の性格は不明である。



第23図　出土遺物

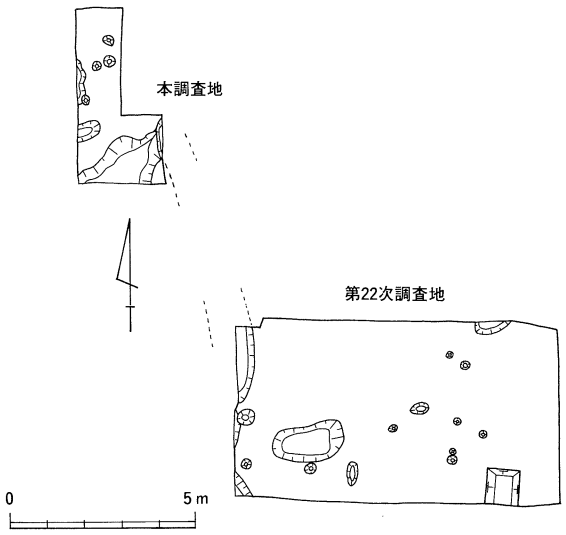
c　出土遺物

本調査区から出土した遺物は、すべて弥生時代中期に属するものである。土坑より出土したもの１点以外は、すべて溝から出土している。

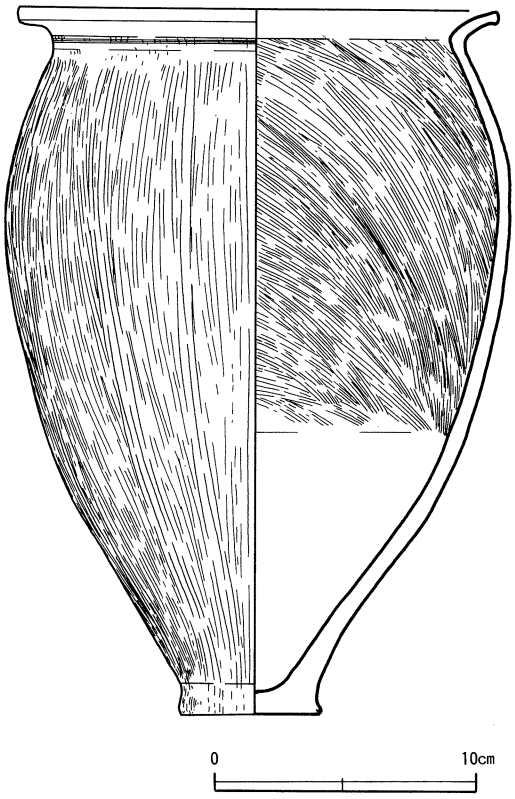
SD－１

SD－１から出土した土器で、復元、実測可能だったのは６点だけである。

１は口径24㎝前後のやや大型の壷で、外面は縦方向にハケ、内面は斜め方向にハケを施し、また、口縁部端のみはナデによってハケメを消している。２は口径18㎝前後の口縁をしているが、器種は不明である。調整は外面、内面とも摩滅のため不明である。３は甕の底部と考えられる。外面は縦方向にハケ、内面はナデを施している。また、外面底部周辺はナデを施しハケを消している。４は甕の底部と考えられる。外面は縦方向にハケ、内面はナデを施している。器体は全体的に薄い。５は壷の底部と考えられる。内面、外面とも摩滅のため調整は不明であるが、底部と内面の一部に指圧痕が残る。６は甕の底部と考えられる。外面は縦方向にハケ、内面はナデを施している。外面底部周辺は３と同じく、ナデを施してハケを消している。



第24図　周辺調査地図



第25図　第22次調査出土遺物

SK－１

SK－１から出土した土器(7)は１点だけで、器種は小片のため不明である。上半までは縦方向にハケメを施し、その上から、直線文、波状文が描かれている。下半は横方向のミガキを施している。

d　まとめ

今回の調査では包含層は確認できず、宅地化以前の耕土、および床土が地山の直上にあることから、削平が著しいことが分かる。

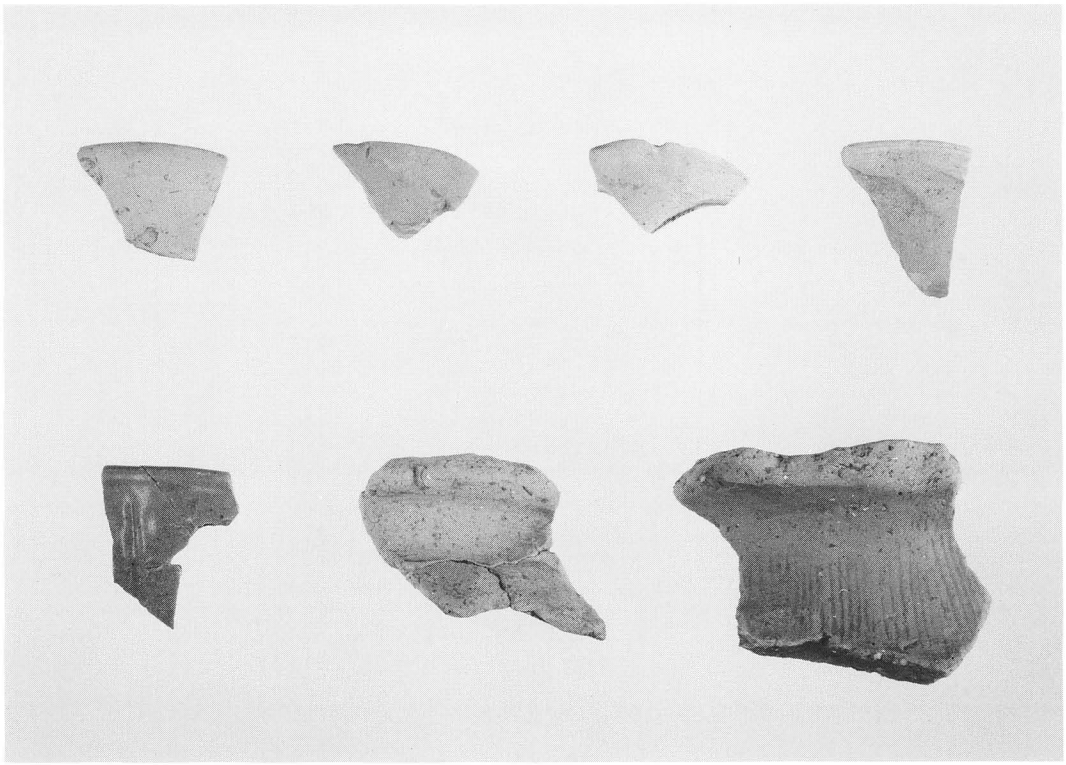
本調査地の西南に隣接する第22次調査では溝が検出され、今回の調査でその延長が検出されることも予想できたが、確実に延長する遺構はない。しかしながら、SD－１の北東の落ち込みは、第22次調査の溝の延長とも考えられ、今後の調査に期待される。

(1)　第1トレンチ（東から）

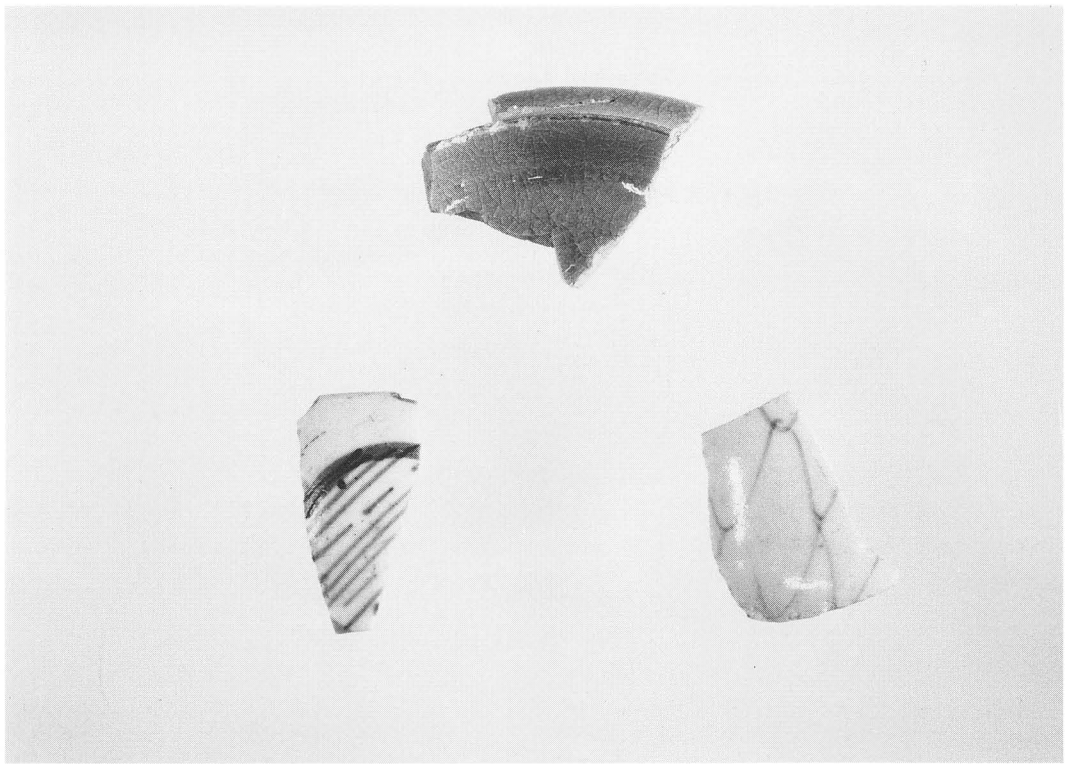
(2)　第2トレンチ（東から）

(1)　杭列（南から）

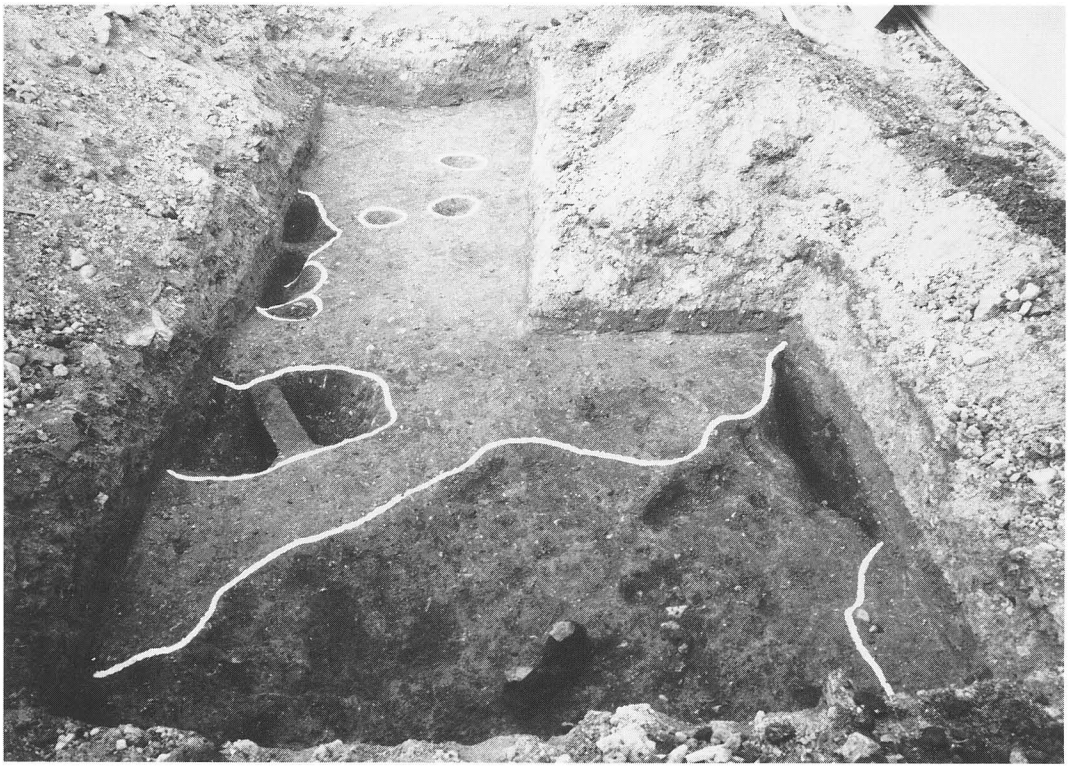
(2)　落ちこみ（東から）



(1)　第１トレンチ出土遺物

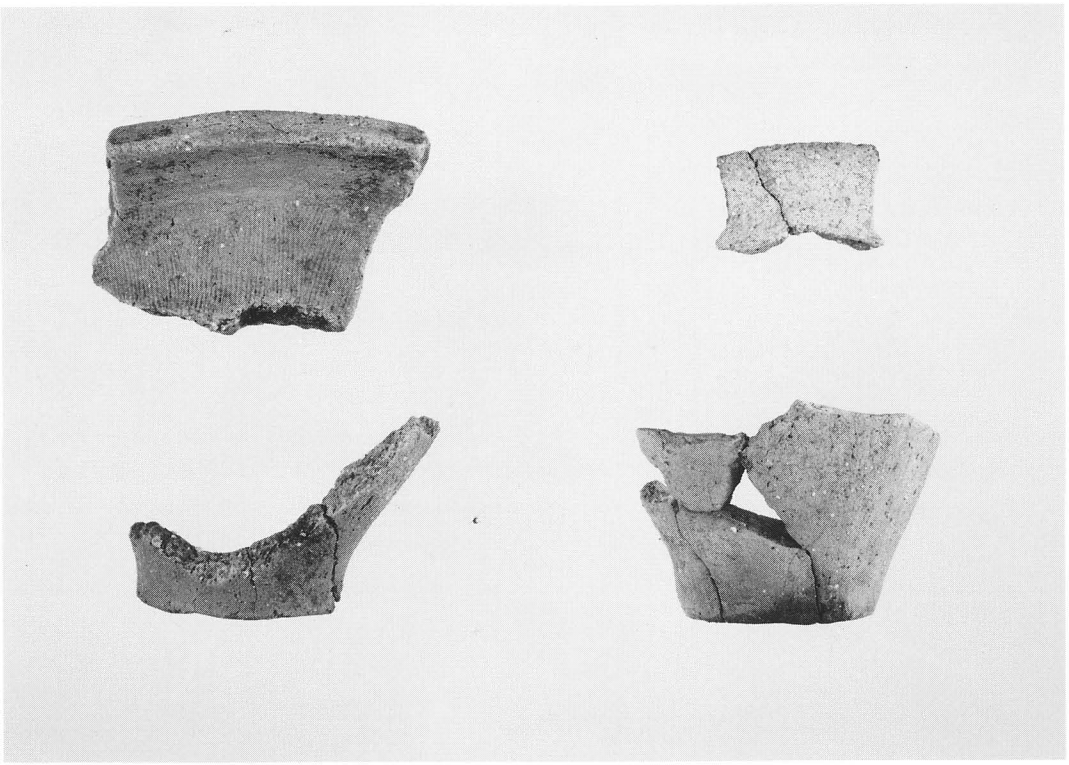


(2)　第２トレンチ出土遺物

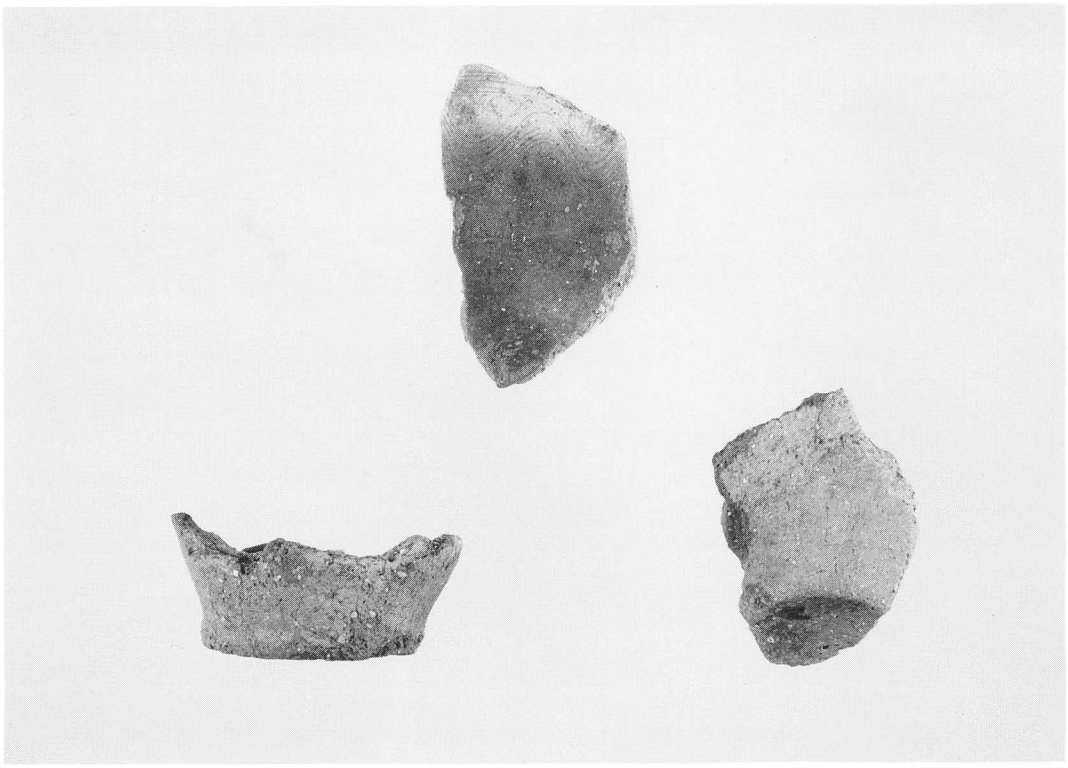


(1)　トレンチ全体（南から）

(2)ＳＤ－１（北から）



(1)　出土遺物



(2)　出土遺物

調　査　組　織

教　育　長	片　山　久　男	（平成４年10月５日まで）
	西　山　幸　男	（平成４年10月６日より）
教　育　次　長	西　山　幸　男	（平成４年10月５日まで）
教　育　部　長	政　井　　学	
生涯教育推進室長	岡　野　　治	
社会教育課長	為計田　佑　二	
文化財係長	藤　井　隆　晃	
文　化　財　係	田　上　雅　則	
	中　西　正　和	（調査担当）

池田市文化財調査報告第17集
池田市埋蔵文化財発掘調査概報
１９９２年度
１９９３年３月
発行　池田市教育委員会
池田市城南１－１－１
編集　社会教育課
印刷　西村印刷株式会社